

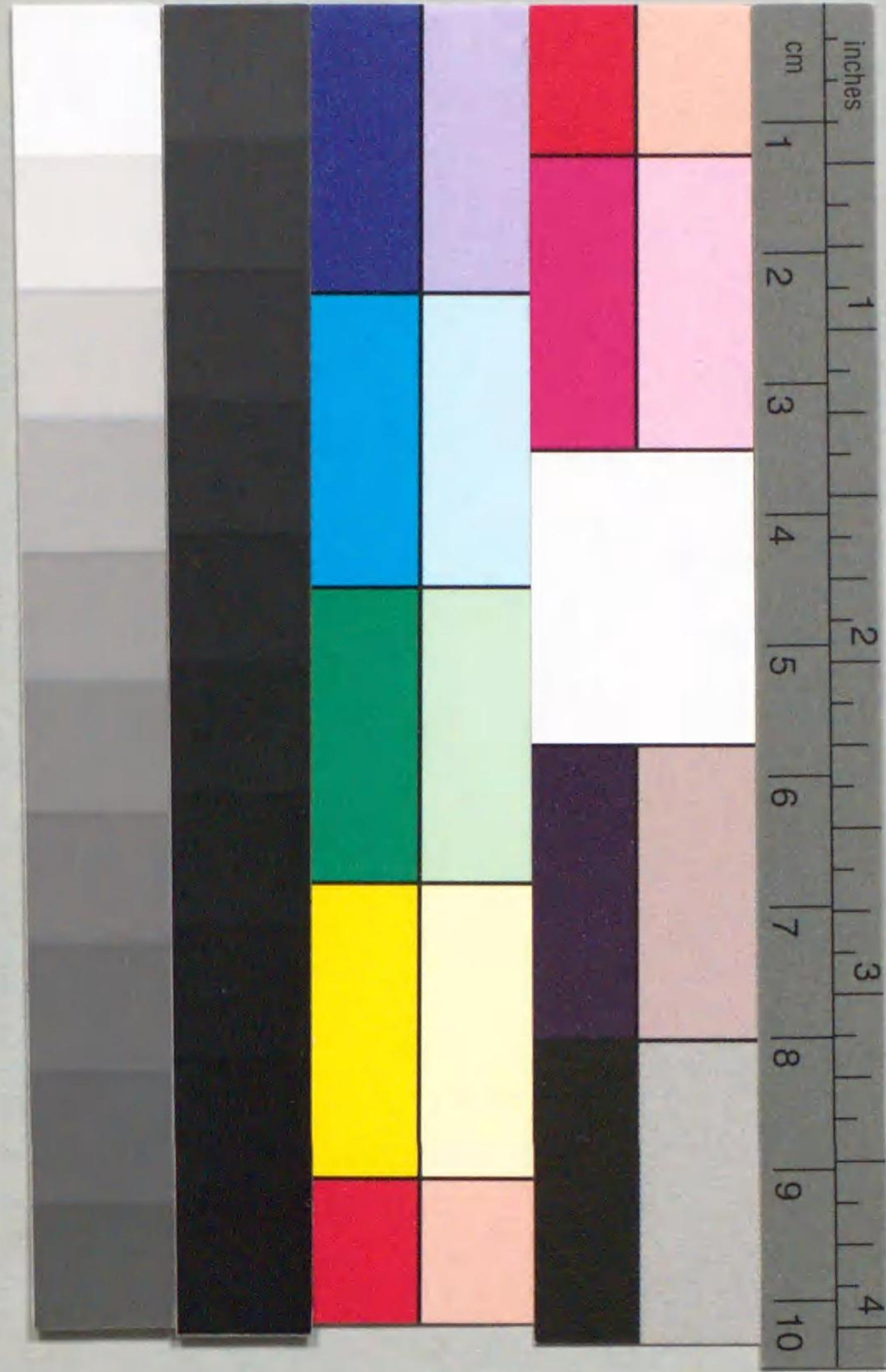
911.36
Ka711m



00308872

著風晉峯勝

話史諧俳治明



一般資料

勝峯 晋風 著

明治俳諧史話

東京 大誠堂

911.36 Ka711m



明治俳諧史話



308872

自序

明治俳諧史話は最初から系統的に記述したのでない。私の主宰する俳諧雑誌『黄橙』の昭和五年九月號から隨筆的に毎月思ひ附いては書き載せ、約二ヶ年半に涉つて連掲したもので、當時は『俳諧東京時代』と題して置いた。

明治文學の研究對象として新文學、新脚本以前の作者魯文、默阿彌などは重視されてゐるが、和歌、俳諧の傳統文學に對しては、明治中期の革新的行動を起した以後の人物に偏して、それより前の所謂舊派の作家はあまりにも存在を認められてゐない。私はそれが何となく憂鬱で寂寥を覺えるので、今から二十年程にもならうか。亡父諭風居士からとき／＼聞いてゐた俳壇の故老、それは舊派の宗匠であつた人々を歴訪して、そのむかし話を筆録する事を心掛けた。永機や幹雄など新派俳句の敵視した代表人物は歿した後で、大夢庵千畝といふ七十餘の老俳を下谷に訪れ、或は夜莊庵化悉と號するこれは父が月並に入る時の宗匠であつた人、及び東杵庵蔦齋翁、それか

自序

ら向島三圃に其角堂機一老の許などでいろ／＼聞き得るところがあつた。その後二三年の間に新派俳句に屬さない俳書をぼつ／＼買集めて、明治元年から二十年頃のものは見附かれれば逡々しないで手に入れた。二十年以後のものは父の本箱にあつたのでそれで事足りた。が、一茶に手をつけ、芭蕉に手が及んで、明治早期の俳諧に關する關心は全く失はれて行つた。

近年舊派の人には接觸する機會は殆んどないが、たま／＼來訪される宗匠などゝ語ると、どうも私の知つてゐる程度の早期俳人の事や俳壇にも通じてゐない。これは今のうちに書いて置かないと、明治早期の俳諧は埋没して了ふかも知れない。さう氣附いて黄橙に執筆する際、自分の手控に合せて藏本を年代順に揃へて置き、それを一棚づゝ机邊に運んで來て、一回分一日乃至二日で書き上げたのが、つもりもつて此の四六判四百五十頁の分量となつたのである。

尤も明治二十二年までゝ筆を止めたのは、正岡子規が雑誌『俳諧』を發刊する前後から新派俳句時代となるので、その邊で一トくぎりをつけ新派俳句の起つてからは、批評的に論じて見たい氣持があつたからであつた。従つて新派以前の明治俳諧史話即ち本書は、多少批評的な記述もしてあるが、概して俳壇の事情の解説に傾いたのは材料の扱ひ方から止むを得ない結果であつた。

明治文學の愛好者が俳諧が傳統的に明治早期より連続して行はれて居る事に興味を持たれ、現代の俳人が俳句といへば新派俳句以後の現象の如く輕信する點を、この書によつて反省されるならば私の希望の一半は酬ゐられたと云はねばならない。私はそれで満足する。

昭和九年十二月七日於橙苑黃

勝 峯 晋 風

明治俳諧史話

目次

自序	一
明治早期の俳壇情勢	一
炭俵蕉風の延長と流行	一
江戸より東京への接觸	二
俳家新聞と木活字採用	四
俳諧新聞紙の内容體裁	七
名家の副號争ひと僭號	一〇
卓郎の法要、對梅宇發會	一一
目安箱日選發句の趣向	一四
馬車牛肉屋電信の發句	一六
類題句集と季寄の新刻	一七
新時代の推移を見る	二〇
新曆前の季寄と其争ひ	二〇
目次	一

歳且の一枚刷と是真畫……………三
 三つ物廢れて三節起る……………三五
 室の八嶋に翁塚を建つ……………三七
 春湖と古池眞傳の板行……………三〇
 東海道行脚と十州紀行……………三三
 八巢謝徳の畫像人名録……………三五
 連句の衰微と其潜勢力……………三七
 技巧は前代に劣らない……………三九

俳人の動きと新分布

……………四四

新しき色彩の東京座へ……………四四
 江戸座及び雪門の傍系……………四六
 三大家の人格と新和性……………四九
 統一的京都、雜居の大坂……………五一
 北越から東海道を廻る……………五三
 舊幕臣と静岡及び關東……………五五
 北門の尖端に光る殘燈……………五八
 時代の姿と歩みと傾向……………六〇

早期俳人の個人的考察

……………六三

僧と武士の不染と又々……………六四
 俳道に與した氷壺の著……………六七
 大蟲の探訪羽人の情誼……………七〇
 鷗外の細木香以に就て……………七三
 苦茗を侘る香以の句境……………七六
 京の公成と大阪の鼎左……………七八
 摩訶庵蒼山の行脚生活……………八二
 東北の俳人江山と葱玉……………八五

太陽曆の分頒と新月令

……………八九

季題語彙としての歳時記……………八九
 太陽曆と舊季節の錯誤……………九一
 新曆適用の新赛季句集……………九三
 連句の新しき季節捌き……………九五
 俳諧教導職と教化運動……………九八
 俳諧人名録の體裁内容……………一〇〇
 芭蕉翁二百回取越句碑……………一〇三

教化的効果と嗣號問題

……………一〇一

招魂祭に於ける俳諧席……………一〇五

没世間的な俳人を憤る……………一〇七
 金原明善の風教的意圖……………一〇九
 茶道の佗と俳味的一致……………一一二
 新判義七名の大舉立机……………一一七
 梅年の雪門と入像供養……………一二九
 春秋庵嗣號問題の裏面……………一三三
 行脚の境涯と其漂泊性……………一三四

明倫雜誌發行を中心に……………一三六

行脚の添状とわらじ錢……………一三六
 明倫雜誌の創刊と其内容……………一三八
 梅年の『續一夏百歩』發企……………一三一
 流石に争へぬ新東京人……………一三三
 教林盟社の『時雨まつり』……………一三六
 爲流の惺庵嗣號と西馬門……………一四〇

尖端的季寄俳諧手洋燈……………一四四

持扇題鑑から手洋燈へ……………一四四
 外題學者の稱ある乙彦……………一四六
 耶蘇虫とコレラの強辯……………一四九

静岡新聞社の乙彦招聘……………一五二

明治五百題と開化の部……………一五五

連句の月並化と語格論……………一六〇

右書のローマ字譯俳句……………一六〇
 予雲の『^{明治}俳諧八十六歌仙』……………一六三
 連句に映せる新風俗相……………一六六
 東京までの持廻り歌仙……………一六九
 傍結び中心の俳諧語法……………一七四

新舊過渡期の人物批評……………一七七

連句早見の奇三と五渡……………一七八
 俳想の自由な見外の句……………一八三
 見左と嵐外十哲の可轉……………一八九
 質屋と見番是佛と秀民……………一九四
 梅室の正系爲山の人物……………一九九
 今七部集の千輅は爲山……………二〇一
 俳學者曲齋一代の業績……………二〇九
 美濃派の低俗を脱せぬ……………二一一
 孤月調と甘海の俳文集……………二二七

雪門の鳳州信濃の葛古……………三三
 商家から出た梅裡士前……………三八
 大阪俳壇の蟻兄と素屋……………三三
 俳句の趣味化と社會的浸潤……………三九

泊船寺と鮫洲抄の再刷……………三九
 永機とみよな草の開板……………四二
 梨園の好俳書祖父の恩……………四三
 當 俳優三十六句撰の新板……………四九
 吉原禮讚より藝妓美へ……………五三

俳壇の靜態と點取調の流行……………六〇

明治俳家集を鳥瞰して……………六〇
 賣出し作家と其の句評……………六三
 有産階級と遊民の妥協……………六六
 點取流行と句調しらべ……………七二
 金羅一派の壓倒的人氣……………七四

月並集と運座の交錯的沿革……………八一

運座法の改良と月並集……………八一

縁日の奉燈風呂屋の掛額……………八四
 寄せ句の高點と金羅調……………八七
 談林座の復活と高點調へ……………九〇
 高點句の吟味と附け肌……………九四

類題句集の頻出と新季題……………九八

素足の行脚とおくの雪道……………九八
 月並集を材料の類題句集……………一〇二
 新題の採用と季節觀念……………一〇六
 五百題と八百題との比較……………一一〇
 勿驚百六十九歳の俳人……………一一三

歳事記の新版及び千句興行……………一三八

ABTELの駆けつこ……………一三八
 掌中に入る銅版豆本俳翼……………一三二
 手桃灯の説をそっくり剽窃……………一三五
 道服の宗匠姿で龜戸千句……………一三九
 永機の新花摘と耶蘇の歌……………一四四

傳統連句と明倫講社の勢力……………一四〇

傳統連句とその批評……………三四〇

地方的に成功した明倫講社……………三四四

八十翁芹舎の伊勢路めぐり……………三四九

不遇な黙地と脱俗的な顧言……………三五四

人氣不人氣が生活上のかぎ……………三五四

黙池の俳諧袖珍鈔と其句境……………三五八

醫者で宗匠で陶宮術の先生……………三六二

混亂した俳號の授受と岱阿……………三六七

洒落氣はあるが句は不消化……………三六七

俳系を棄つる事弊履の如く……………三七一

開化風俗を反映せる連句表……………三八一

芹舎の八十賀と泮水園句集……………三八二

乞食井月の追善に開化表合……………三八六

連句の叙景に一脈の新鮮味……………三八九

義仲寺で七日七夜の大法要……………三九四

其角が義仲寺を呪つた手紙……………三九四

其角堂の嗣號代は金三百圓……………三九七

やまと新聞の前觸れと永機……………四〇一

確に枯尾花再生の大法要だ……………四〇一

柳營連歌師と古連歌の再建……………四一〇

舊幕府の傳統藝術の保護策……………四一〇

新聞人採菊のインテリ趣味……………四一三

古連歌の傳統は土岐善靜へ……………四一六

松尾家は明治で亡びたのか……………四二〇

猿蓑附合注解と指直の立場……………四二三

明治三大家の春湖と其生涯……………四二七

春湖翁傳を草した信夫恕軒……………四二八

蒼山と主僕交代の雲鳥日記……………四三〇

蒼虬の後塵を浴びない風格……………四三三

戀が窪の農夫から出た可尊……………四三七

モダン乙彦と才媛久良女……………四四三

秋巖の賀庭及び乙彦の落魄……………四四三

墓場で轉んだのが死の前兆……………四四六

父子二代の花壇鏈々と誤傳……………四三〇
 才媛久良女の花折と其句集……………四三三
 明治萬題集に就いて……………四三九



目次畢

明治早期の俳壇情勢

炭俵蕉風の延長と流行

明治元年の東京奠都を以て明治俳諧の時代に入ると云ふ風に發生的解釋は下されない。更に前代に遡つて考察を要する。蓋し明治早期の俳諧は前代の延長に過ぎないので、劃期的には江戸時代と一年と隔てゝゐないからである。江戸時代の末期を支配した俳諧は炭俵蕉風の諸派である。『炭俵』の附合に現れた輕み、それは町人文學としての淺き趣向と氣分を以て、輕く言廻したところの表現法を流行的に覘つたものである。天保三大家と稱される京都の南無庵蒼虬、江戸の自然堂鳳朗の兩派と鼎立して梅室素信の一門が全國的に壓倒的人氣を持つてゐた。地方に古い地盤のある美濃派は裏面に勢力を有したが新人物の出づべき見込みがない。大阪に再興貞門及び檀林を標榜する一黨が點者として内規を定め、炭俵蕉風に對する反抗運動を企圖してゐた。反故庵牧岡天來はその貞門を一枚看板とした霸氣のある人物で、梅室をたゞきのめすのが目的で『俳諧七

草』を板行した。その考證といひ論點といひ貞徳時代の古書を引用して、指合、去嫌の咎立を能事とする固陋の説であつたので、梅室側から『齊々志』及び『磯の波』を出して争ひ、中間批評として『春の田』や『葉分の風』があらはれ、世間的には梅室側に軍配が上る形勢を招いた。天來は憂憤して惜かすその晩年は大阪の天保山沖に投身して論争の幕は悲劇的に下されたといひ傳へる。梅室は七十にして愛妾にかしづかれ一子を儲けた非風流生活をしながら、歿後『梅室翁紀年録』の如き小冊子とはいへ個人的年譜の板行され、その發句及び附合集は半紙本に小菊本に袖珍本に、それぞれ體裁の異なるものが續刊されてゐるのを見て、評判の甚しかつた事が想見される。明治早期の俳人で教林盟社長として徳望のあつた月の本爲山は梅室の遺弟である。『俳諧新聞誌』を發行した尖端俳人對梅宇乙彦はその爲山門であるから、明治早期の俳壇に梅室系統の流行したのも所以ある哉といひたい。

江戸より東京への接觸

蒼虬一派は以前から京都で榮えてゐた。蒼虬は豪華な札差生活をした守村抱儀の懇望で江戸へ

下つたが、門戸を張るまでには至らなかつた。性來の慾張と評判された人物だから抱儀から約束の金三百兩を提出されて俳諧なんかはどうでもよく、その金を京都へ持戻るのに苦心した事だらう。明治改元の年まで京都の双林寺を背景とした芭蕉堂公成は蒼虬の後を嗣ぎ、花の本として明治時代に美名を咲かせた八木芹舎も蒼虬門人である。鳳朗一派は二代鶯笠となつた人間が東海道の箱師と知れて、世人を吃驚させた挿話もある位だから、明治時代に存在を知られる門人を残さなかつた。『鳳朗發句集』すら逸淵門の惺菴西馬が出板してゐる。江戸末期には既に没勢力となつたかも知れない。その他明治に交渉ある前代の俳人系統は、關東蕉風の可布庵逸淵と門人西馬及び田喜庵護物の一派、それから甲斐の嵐外の椰屋系、大阪では淡々系の八千房一門であつた。逸淵の弟子に津藤大盡の香以や、落語家の弘湖があつて一時流行したのは、話題を賑はしてくれて面白い。上州高崎から出て江戸に春秋庵を構へた逸淵は、晩年武藏の本莊へ隱居したが、飄隱居の飄々乎たる性行を後人から慕はれた。西馬の門から『俳諧明倫雜誌』に據つて古池教會を創立した俳諧教導職春秋庵幹雄が出た。西馬は左官の弟子で毎晩湯錢五文を持つて逸淵の庵に立寄り『七部集』を愛誦して湯に行くのを忘れ、行燈に湯錢が溜つたので逸淵の妻から『七部集』を買

つて貰つた逸話を幹雄が傳へてゐる。春秋庵を嗣號せずして關東蕉風を弘通した態度を床しく思ふ。護物の門には菊守園見外が出た。場ちがひの嵐外を師として爲山と共に明治早期の三大家と知られる小築庵春湖、同じく佳峰園等裁が大阪の八千房を師として東京に現はれた。師弟必ずしも同一の傾向を取るとは云ひ難いが、この一事が江戸から東京へ俳諧の時代的接觸點を暗示してゐると思ふ。

俳家新聞と木活字採用

江戸時代の延長とは云へ、明治早期の俳諧は新時代を開展する爲、文明開化の氣分を既に醸生しつゝあつた事を見遁せない。『俳家新聞』の發行もその一である。バタビア新聞の翻譯を嚆矢として新聞の名は新造語となつたが、『俳家新聞』は早速これを月並の摺物に借用したのである。標題の右傍に慶應卯冬、辰春分と採録した年の干支を記してあるので、明治改元の同年、慶應四年の春の印刷である。印刷の語は活字本であるから不釣合に聞えない。木彫の活字で且つ行書躰なので一見整板と同じだが、一行十三字詰で疊語及び接續した假名字は二字分に扱つてゐるので、

注意すると活字本に疑ない事が了解される。發行は三年前から計劃されたと見えて孤山堂卓郎の左の序文がある。

俳家新聞

此書は諸俳士の新調を集て四季に活字板に摺立、三都は云に及ばず遠近諸國に送り、猶其士の俳士の句をも乞て書中に載ん事を欲す。されば各家の新什海内に傳播して編輯摺物等に裨けあらん事を祈るになん、諸風子必らず秘惜なく玉什を洩し玉はん事を希ふ而已。

孤山人 卓郎

編集は弘美、校正は見外、香城の二人である。卓郎は慶應二年故人となつたので、實際の發行には携らなかつた譯である。序文の「四季に活字板に摺立」が三年越で漸く印刷されて、奥附を見ると堂々と龍尾園活版所と記入してある。内容は四季發句の混題で普通の摺物にかはりを見ない。文章は乙彦が「今年睦月廿四日月の本の門を敲きて」と爲山を師とした入門記一篇だけである。正誤表の附記してあるのが活字印刷らしい。句者は三都判者をはじめ地方的に名ある者を集めてゐる。

塵塚の奥しづまりて月とうめ	京	黙	池
窓明て雛のぞかせよ三日の内		芹	舎
こゝらまでまだ玉河の蛙かな	大阪	鼎	左
けふの日は薺いはふか干菜寺	三河	蓬	宇
はつ空の匂ひや胸の透ばかり	國館	無	外
一日の霞やふれてゆふからす	東都	永	機
見つゝゆく梅に坂なし爪上り		香	以
黄鳥のなくや棚びくけぶり先		幹	雄
題臥龍梅			
しら雲を吐たさまにも梅白し		等	栽
かまくらや流石にひと木遅櫻		見	外
待花は咲て見る日におくれ鳥		爲	山
月の下の門に入る			

糊なめに軒端へよるや雀の子

乙彦

『俳家新聞』とは名ばかりで、其の體裁は全く月並の摺物と同一である。

俳諧新聞誌の内容體裁

新聞の趣旨にやゝ叶ふやうになつたのは明治二年對梅宇乙彦の發行した『俳諧新聞誌』再編である。その體裁は諸家の近詠夏春の發句を擧げ、乙彦の日記があり、新聞附録龍蛇吟行と題して諸家の時事吟を掲げ、質問答を添へて凡例を最後に記してある。龍蛇吟行は新東京の荒涼たる風物を詠じて多少とも不平と感慨とを洩してゐるのが参考になるので左に掲ぐ。

戊辰の春

今年も東叡山に登ることを許されねば、花見ることを得ならぬほどに餘所にして詠めばやとて、廣小路のちまたへ出ればゆきゝの傍に炭團なん干たる構へありけり。こは賤の者の寒さをしのぐ最要なればや、もろこしには墨大歸とぞいふなる。爾はあれども憂を並べし市中にはいと似げなくて無下に鄙びたりけるを、昔九重の中に麥を干たるを見て、都の衰へたる

を歎かれし西上人の心もおもひやられ侍る。

吹れ来て汚されまいぞちる櫻

乙彦

二百年の昇平僅三ヶ月を過ぎるにかゝる亂舞の端となる。當時の形勢見るに聞くに魂をひるかへさぬはなし。

花襲ふ風や出口の處く

見外

時候のさはりにて軒並に立退騒の風邪大流行、醫師も匕を投て立のく有様、加持祈禱の行者も見はなして逃出す有さま。

耳とちて花をこゝろに午睡哉

等栽

東叡山に屯せし彰義隊敗走の跡にて

吹かなくも落る松葉を青嵐

乙瓢

上野の戦場を遁れ出て

血を流す雨や折ふし時鳥

永機

夜分の往來無提灯相ならぬ御沙汰に

手ぶらなる我ながめそ月今宵

等栽

敕稱東京

旭に向ふ聲や東の都鳥

大蟲

霜月十八日中の卯、東京府新嘗會を行はせ給ふ

寺々にうなる鐘なき霜夜哉

甘海

鐘つかぬ夜の静さを霜の聲

乙彦

句境は平凡ながら混沌たる時代相を、ともかくも反映してゐる。

『俳家新聞』が活字を採用して文化の尖端を行く印刷術によつたのに反して『俳諧新聞誌』は舊時代の遺物である木板を以て迅速を期したといふ、凡例が時代錯誤に似て、活字印刷の煩雜で實際に適しなかつた當初の事實を證明してゐる。漢文を假名交りに改めて、次に引用する。

本編前輯ハ活字板ヲ以テ發行セリ矣、這ノ回更ニ正板ヲ以テス。盖シ各家ノ新什將ニ海内ニ布告セントシ時ヲ失フコトヲ恐ル。故ニ事ヲ計ルコト忽卒ノ門ニシテ、備書剗削ノ工人ヲ督シ、且校正ノ違アラズ、唯編成ノ迅速ヲ以テ要ト爲ス。

と辯解してゐるのは滑稽である。乙彦は下谷長者町の對梅宇で編輯したが、校正は横濱の十字庵月朶の名義になつてゐる。乙彦は再び改題して『對梅宇日涉 卽新聞誌』として其の四編までを發行したが、號毎に新聞といふよりは雑誌の編輯法に接近して行つてゐる。

名家の嗣號争ひと僭號

江戸時代にも流石芭蕉庵を僭號する傍若無人の人間は出なかつたが、俳人としての系圖を古く蕉門の名家に求めて格式を高める遺風は明治にまで持越された。明治の舊派を通じて其の門閥を誇つた永機は、嘉永六年津藤の香以の後援で『樸口集』を刊行した時分は深川座で満足してゐたが、文久三年不忍池畔の其角堂で『不忍千句』五吟を興行、卓朗の序を得て出版した後は其角堂を庵號として、いづどこからか半面美人の點印を手に入れた。其角堂の正系たる承認を得たのは一具庵尋香の盡力で明治以後の事と云はれる。雪中庵は五世對山の時代に一門分裂して、庵號は豊後府内の城主で蓼太以來雪門を後見した太乙樓大給不麴子が預つてゐた。どういふ事情からか舊幕の家士で對山門の推陰が十六代將軍の引退に扈從して静岡に行き雪中庵六世を嗣號した。太

白堂は六世孤月が隱居して桃翁となり門人四夕が七世を承けたが、師より一年前に歿したので空位のまゝ孤月も明治五年故人となつた。探茶庵は杉風の直系五世杉露が傳家の俳諧眞蹟を悉く新川の酒問屋鹿島屋六三郎に入質し、遂に抵當流れとなつた程で庵號は正當に繼承されたと思へないが、杉舟といふ者が系圖上の六世となつてゐる。そこへ明治二年四月松村桃仙なる者が泊船堂の嗣號者として名告つて出た。乙彦は「此人湖東問答を梓行せし松村桃鏡の子孫」と註して傳系を怪します『俳家新聞誌』に紹介してゐるが、桃鏡は水上亭と號したので、芭蕉の泊船堂を冒瀆する行爲は敢てしなかつたから、桃仙が維新のどさくさ紛れを利用して僭號したのではなからうか。春秋庵は道彦か長翠かゞ白雄の後を嗣ぐべき筈で、葛三を二世に据ゑたのは門人間の葛籐を證してゐる。その後の系圖は混淆して梅室門の梅笠が縁故なくして相續するかと思へば、弘湖が逸淵門の故に七世となり、後に幹雄は同門有柳に五世の嗣號をすゝめて『春秋稿』の十編を明治十二年板行させ、それを又幹雄が襲つて春秋庵の正統と稱した如きは不可解である。卓郎の孤山堂が明治時代、北海道の函館と伊豆の三島とに二人の後繼者が出て庵號の正潤問題さへ發生した。併しこの問題は『俳諧新聞誌』の「九月初旬卓郎追善集成る。下總堀江なる釣月編す」と見

えて、釣月は卓郎晩年の門人で藻魚庵の門に入る事を註し、「題して夏書始と號せり」とある明治二年の板本『夏書はじめ』によつて解決される。釣月の序に「今の師藻魚叟は孤山老人にちなみ厚くて、其終焉の枕にも門弟等と共にまことをつくされ遺言おちなくし置て、無外子の函館より歸るを待て堂號を嗣せられ、倚頼の條々没後までつとめられたる」と述べてゐるので、函館の無外がその正統であると決してよい。藻魚庵は池永太蟲の庵號である。

卓郎の法要、對梅宇發會

けふの東京、きのふの江戸、お互の安否さへ知れない不安な一年を過ぎて、明治二年の四月十六日故人孤山堂卓郎の追福法要が深川長慶寺で營まれて東京一流の俳人が列席した。前に記した『夏書はじめ』で見ると導師は長慶寺の廿一世雪頂大峯和尚、副寺は佛山、曲座は智鑑、行者は卜僊で、客位として招かれた宗匠は月之本爲山、小築庵春湖、施無爲庵甘海、對梅宇乙彦、泊船堂桃隣、三徑庵蕉露、佐藤小雲、大岩五休、青山菊雄、菊守園見外、佳峰園等裁の十一人で、見外、等裁は差支あつて缺席したが、文人として中根鳳齋、柳田正齋の二人を加へて大抵出席した。

同席の主座は卓郎門人十二人、幹事は藻魚庵大蟲、大墳釣月の二人である。

今に聞ひと聲うれしほとゝぎす

卓郎居士

卓郎の遺吟で協起の歌仙一順を行つて當日の墓碑開眼供養は終つた。東京となつて正式に宗匠の顔を合せた會として、又宗匠の執れも各流派を代表する人物揃ひなので『夏書はじめ』の記事は特に重要性を持つてゐる。諸宗匠の庵中の會もぼつ／＼行れたらしい。明治三年には二月朔日が桂之本發會、三日は佳峰園發會、六日は對梅宇發會といふ風に引續いて俳人生活も安堵した如く見えた。對梅宇の發會は出席五十四名、文臺は亞物の捌きで給仕の采配は柳橋の哥妓房八であつた。席上書畫の展觀があつて大沼枕山、高林二峰、佐竹永海、奥原晴湖、萩原秋巖その他の文人墨客と共に四十名家の出品を見た。俳人の染筆は早春俳句 菊守園、野梅俳句 佳峯園、東風俳句 小築庵、青柳俳句 施無畏庵、臘月俳句 藻魚庵、寶珠畫賛 月之本の六家である。その日の兼題は春風であつた。

草に見るまでやまとの春の風 等 裁
負た子を道に下すやはるの風 みき雄

たらくくと小坂下りれば春の風	宇山
春風やひとつ着かへし縫おろし	月彦
春風や舩立かけし海士の家	千畝
春風に吹はらしたる野山哉	爲山

宇山は後の鳴立庵、月彦は東杵庵、千畝は大夢庵で當時新進の作家であつた。發句と文臺納には他派の宗匠を招くのが前代よりの恒例なので對梅宇の發會もそれに倣つたのであつた。

目安箱日選發句の趣向

新東京の俳人生活が點料で支持された事は前代と同一であるが、維新後暫らく經濟的の恐慌で市民は安閑として發句どころの話でなく、宗匠は點取もなくみんな收入減に苦しめられたらしい。淺草の施無畏庵甘海は俳諧目安箱といふものを庵中に置いて、一句に錢八文を添へてそれに投ずる新案で點取を勧誘したといふ。又これは京都の話になるが千種堂卓志といふ宗匠が四條通境町南側の草庵門口に、おでんやの屋臺まがひに高さ三尺二寸、横二尺三寸の白木の箱を据ゑ、

その上に日選發句集と貼紙をして入式は一句十二文十句百文、景品は秀逸に扇子、十内は短冊、二十内は小短冊を呈上する規定で、投句は即日採點して結果をその箱の上部に掲示し、「御名前の方は庵中へ景物とりに御出可被下候」と添紙を貼つて置く新趣向で、その新奇な催しに釣られて日々五六百句の投吟があつて大に流行したさうである。神社佛閣への奉額、奉燈も前代と同じく行はれて催主の宗匠は奉額料のあたまを刎ねてそれをも收入の一部としてゐた。明治三年の春淺草觀音の開帳に施無畏庵が大額奉納の企願を起した。一句の出詠は金一圓づゝ入額料を徴し三百五十句の應募があつたが、一錢も私しないで全額三百五十兩を投じて立派な額を本堂に納めた。「對梅宇日涉」にその記念出版の仕様冊を配送されて「東京第一の盛庵と見えたり」と驚いてゐる。尤是は提灯記事かも知れない。運座に呼ばれて行くと宗匠には包み金の謝儀が出た。運座は北元の「紙ついで」に雪中庵完來の時代に起つたよしが見える。互選制度はまだ行はれなかつたので、膝廻して宗匠の選句を規つて競詠した事と思はれる。人心の安定するに伴つて一時中絶した運座も復活して行つただらう。以上は俳諧新聞誌の改題『對梅宇日涉』第四編の記事によつたので、これを以て新東京の俳人生活が推知されよう。

馬車牛肉屋電信の發句

明治改元の年から『俳家新聞』の如き俳書は板行されたが、年一年文明開化の新世相を開展したので、發句なり附合なりにその反映を見るべきで當時のものに向それが出来て来ない。明治三年板の『對梅宇日涉』の發句にそれらしき片鱗の二三散見するばかりなのは甚だ憐らない。こゝに新東京の時代相のあらはれたもの、開化思想の覗はれるものゝ二三句を摘録する。

むかしより住なれし地所を賜はりし御代の有かたさに

橙の草薺に炭て門のまつ

半醒

龜戸にて

此邊は馬車も通はず梅の花

仙月

近時江湖上に牛肉の盛んに行はるゝと古今未曾有にして、鬻ぐ家街衢に並び、そが門の目的に立たる紅白の旗は東風にひるがへり、軒に釣せる行燈の赤文字は朧夜にも輝き、窓障子の硝子をすける食臺の器等、異國風俗を盡したるは眼も驚かす斗にこそ。

春もまだ寒さ残りてくすり喰

華兄

電信機發弘して、便利なりければ

鈴で呼仕かけや梅のはなれ家

吸霞

下總の矢作勝作は武勇の壯士なりけるを惜むべし、去年の三月二十有五日、奥のみやこてふ地にて戦死せられたりと聞えけり。享年三十六歳也とぞ。

手折られてちるも櫻の譽哉

直鏡

橙の句は新政府の寛大な處分を喜んだので、歌のものゝ名に似而非なるものだが、「代々の處に住て」を橙と草薺と炭の文字を借りて洒落れたのである。梅に馬車の配合は新趣向である。牛肉屋の描寫は『東京繁昌記』を読む如く、電信を驚異した句は電話の方に適する。惜まれた壯士は賊軍に投じて敗走した一人であらうか。これら數句の上に新東京の空氣が搖曳してゐるを見るが、まだく前代の因襲を脱するまでには至らない。

類題句集と季寄の新刻

歳事記と一萬句、これさへあれば俳人の資格を落さないと現代の大衆は信じてゐる。明治早期の俳人と雖大多數は同様で歳事記は馬琴の原著より青藍増補の『葉艸』を重寶としたらしい。一萬句類似のものは『俳諧五百題』の題名で白雄の著者名を冒したそれを嚆矢として、嘉永、安政、文久の年代を頂くものが愛用された。五百題と稱するものゝ題の説明はなく類題俳句集に過ぎない。連句作者の必携書として『手挑燈』と『持扇』とが喜ばれた。明治二年不去庵を號した幹雄が『千題掌玉集』の春上下二冊を出版した。流行の五百題を量に於て倍加せんとしたもので不知庵寄三の序文がある。明治の類題句集として最も古い。特色は「此書は公事神事等常ならぬものはいふもさら也、草木禽獸蟲魚に至るまで發句の頭書に題意を註釋し、又言葉のとゞかざるものは畫圖を加へて疑ひをはらさしむ」とある點で頭註に簡単な説明とさし繪をところぐに挿入してある。潭堂得水の校訂で書肆の名は記してない。歳事記よりやゝ簡略な季寄の書として『俳諧三千題早引略解』の春上中下三冊が、すこし後れて明治五年に新刻された。編輯者は信州諏訪の俳人五味寥左である。正月、二月、三月及び三春に通ずる季題をイロハ順に分類して、豎一行に題を擧げその下に二行の割註を施し、例句を二段に附載した體裁に新しい意匠を見せてゐる。『年

浪草』や『博物筌』の月令順で引き難く作例に乏しいのをイロハ引きで且つ例句を多く掲げて簡便にしたものである。發行者は東京甘泉堂とあるが、本書に序文を寄せ又校合者となつてゐる施無畏庵甘海が出板を引受けたのであらう。附録の人名録には作者の氏名、住所、小傳を記してあるので参考になる。刊本の型は『千題掌玉集』と同じく今日の四六判に相當する小菊本である。新曆發布前なので季題は依然太陰曆を用ゐて説明に異色を見ない。例句も開化材料或は氣分を抜ひ又は詠じたものを殆んど見受けない。これは歴史的に考察する者をして甚だしく失望と不満を感じしむる一缺點である。

新時代の推移を見る

新暦前の季寄と其争ひ

明治五年太陽暦が採用されその頒布を見るまで、俳諧の季題は悉く太陰暦に基いて四季十二月に配屬され、それが季寄の部立を慣例的に決定してゐた。季寄に関する疑ひが起るとすればその日次、十二月月に配屬するとしてのその月の何日かに就てあつた。『俳諧新聞誌』の三編、四編に涉つて陳辯された初夢の争ひもその一例である。問題となつた發句は菊守園見外が『俳諧六百題』に入集した、

初夢の 覺て二日と成にけり

五 休

である。武藏の皆如といふ俳人が、三餘齋龜文の著『華實年浪草』に準據して、此句が初夢の題に叶はざるを難じたのに端を發する。五休は蘆明庵と號し、新吉原の亡八クツワで『季寄持扇』の序者であつたが、初夢の正月二日説は知らなかつたと見えて、皆如から「五休は年浪草は用不_レ申や、

用不_レ申候は其譯承りたし」と詰寄られて答に詰り、「年浪草を用ゐるゐざるは習學中の論にて答にも及ぶまじくや」と苦しく云ひ遁げ、『年浪草』と共に重視された鳥飼洞齋の『月令博物筌』に「初夢、大晦日夜より元日あかつきにいたるまでに見る夢也」と註してあるから、これを引用すれば辯解が成立するものを「初夢、御傘はなび草には見えねど、増山の井立春の朝の夢、毛吹草に俳諧の部にのせず、連哥四季の詞部に齒固初夢と並び出せり」と貞門の古例を楯に皆如の論難をかくく防げるものとした態度が拙い。前章に掲げたみき雄の『千題掌玉集』は「山家集に年暮ぬ春來べしとて思ひねのまさしく見えてかなふ初夢、とあるを考ふれば晦日の夜、元日の曉がたなれど今は二日の初夢とす」と説いて二日説に荷擔してゐるが、寥左の『三千題早引略解』には「記事曰、凡初夢トハ大晦日ノ夜ヨリ元日ニ至ノユメ也、以ニ畫船ニ布_ニ臥榻_ニ被底_ニ」と述べて元日説を採用してゐる。五休の自註の如く「愚が作意は立春の朝見るべき夢を年尾の紛しに元日もあだに過し、夢見てさめたれば二日であつたと、ぬかりはせじなと申されし不變の變の滑稽をたどりての自觀也」であるなら西行の歌意に適してゐる。いまさら『五元集』の

初夢や 額にあたる扇より

其 角

の作を「流石題意に拘泥せぬ今日の俳諧と感伏し侍りぬ」など、後悔するにあたらぬ。元日説を堂々主張すべきであつた。此争ひの初夢は元日か二日かの日次に就ての兩説は舊時代のむしかへし説で問題視するに及ばないが、太陽曆の採用と頒布は歳時月令に關する季寄の部立を全然根本から覆して了つたのであつた。

歳旦の一枚刷とは眞畫

俳諧年中行事の一として春興を刷つて年々知己一門に配る恒例が古くからあつた。明治の初期それが廢るところか寧ろ盛になつて行くやうに見えた。京都の俳諧師の家で元日の發句に脇句、第三をつけて三つ物連歌と稱し、それを呼び賣に出したのが歳旦の濫觴である。呼び賣の三つ物は疎末な一枚刷であつたが、井筒屋などの書林で家々の一枚刷を合綴してその年の歳旦帖と題したものが今も残つてゐる。かうして歳旦には一枚刷と一冊本とが年と共に藝術的の意匠を以て發達して來た。江戸末期の春興一枚刷には漆繪で名高い柴田是眞筆の彩色繪が最も流行した。一冊本の歳旦帖には渡邊華山筆のさし畫が喜ばれた。明治早期の一枚刷は同じく是眞筆に意匠の卓抜

なものを見受ける。形状は大は奉書全紙に發句を二段に書いて、それに是眞や圭岳等の五彩絢爛な刷り畫を添えて金銀泥を惜しまず使つたものがある。中は奉書二つ折に發句は一行書で彩色の疎略な歳旦景物を描いたものが多い。小は二つ折の奉書を更に半截して墨刷の略畫で間に合はせたものである。此大判の華麗な一枚刷は富豪の後援者を持つ俳諧師でなくては不可能であつた。さうして宗匠は歳旦一句につき若干の入集料を徴して正月の小遣ひにあてたのである。一冊本の歳旦で明治の年號ある最初のは乙彦の『芳春帖』位である。『芳春帖』の前半は乙彦の岳父萩原秋巖の書で奉書を小菊型に仕立て、その一丁毎に發句一章づゝ揮毫してある。作者は乙彦の對梅宇社中の人々で、中にも

とりあつめ見れば數あり露の蓋

月の江
かつら女

此かつら女が日本橋室町の豪商竹原卜早の母で俳諧の爲財を散じた婦人と云ひ傳へられる。後半は筆耕の手で雜然ならべ書きである。作者も對梅宇社中に限らないから入集料不要のかはりすべて簡略に取扱つたものと思はれる。三つ物が三節となつて春興は發句のみとなつた當時、表六章の連句がめづらしく掲げてある。

新らしきものゝ久しや門かざり
 寶舟うる聲の花やか
 東郷
 春霞猫鳥の浮く水見えて
 乙彦
 あふぐばかりの團扇ではなし
 東甫
 明月に裂かぬ羅ひき被き
 郷彦
 零餘子の蔓の垣にまつはる
 甫彦

發句は門かざりの歳旦の題で、脇句には寶舟をあしらつてゐるが、これも前に問題とした初夢を正月二日とする説にしたがつてゐる一例である。社中を除いて作者は京都の芹舎、黙池、九起、東京は等裁、見外、春湖、爲山等の大家揃ひである。裏表昏の二に

明治二歳次已巳太簇編成

東京下谷長者町一丁目横丁

對梅宇藏板

とある如く明治二年の歳旦帖である。輪廓の罫を萌黄の二度刷としたのが頗る凝つて見える。

三つ物廢れて三節起る

歳旦の三つ物連歌が廢れて發句本位の春興の三節となり、遂に三節が三つ物の位置を奪つて了つたその事は、明治時代の俳諧を評論する上に重要な問題である。俳諧の名稱は俳諧の連歌の發句、同じく附句を意味する略語の俳句及び連句の兩者を包含してゐるにも關せず、俳諧と云へば單に連句の代名詞なるが如く慣用され、甚しきに至つては連歌と俳諧とを指す場合の熟語、連俳を連句と同一に使用する無識な學究の徒が近來は出て來てゐる。名稱の事はしばらく措いて、蕉門以後俳句の特殊な發展によつて連句はやゝ閑却され、元祿の蕉門に對峙する連句の名篇は天明文政の俳句隆盛時代には出現を見なかつた。その結果春興も發句本位となり、古き歳旦帖は歳旦の三つ物連歌を卷頭に置き、或は三つ物に代ふるに歌仙を以てした場合もあるが、卷頭には必らず歳旦の連句を出して、引附に新春及び歳暮の連句、發句を添ふる慣例あつた連句を除外し、俳句のみで間に合はせる簡便な三節が發生したのである。三節とは蓋し曆法の廿四節から出て歳旦、春、歳暮、の三者を意味するのであるが、その孰れを前後に位置すべきかの順序は一定

して居なかつた。たとへば明治二年の乙彦の『芳春帖』に掲ぐる三節は

三 節

かをとるとて梅も添たり衣くばり
初鶏や市は燈りの花ざかり
垣裏は凍のもとらず梅の花

避險道齋

桂

宇

歳暮衣配りをはじめに擧げ、歳旦の初鶏を次に入れ、新春の梅を終に掲げてある。此を逆に新春、歳旦、歳暮の順位で記したのもあるが、三節は歳旦帖の連句本位を省略して發句を主とし、百韵に對する歐仙の如き關係にあるのだから、歳旦の發句を第一位に擧ぐべきであらう。例證を座右の摺ものに求めると

三 節

萬 歳 の 戻 り し 後 や 松 の 聲
丘 へ 出 て ふ く を な が め む 春 の 風

ゆくとしや置場定むる竹箒

辛未春

みき雄

といふ豎横四寸の小奉書一枚刷がある。外枠を水色で刷つて中央にまるく發句を入れる位置を取つて、その中に右三句を二行づゝに配置してある。三節の二字は笈紙に刷つて下方に不去庵と記してある。不去庵みき雄——後の春秋庵幹雄の辛未春、明治四年の春興である。萬歳、春の風、行年の順位で三節はこれを本格的のものと定めて同時代以後、今日でも舊派の一部には右の順序で年々三節を印行してゐる。猶、明治時代の俳諧が子規によつて連句を非文學として拒否された爲ばかりでなく、全く連句を除外して俳句中心に發達した原因は、歳旦の三つ物連歌が時代の推移と共に三節の發句となつた點にまで遡つて考察を要することを注意しなければならぬ。

室の八嶋に翁塚を建つ

近代俳人の信仰對象は芭蕉翁である。芭蕉翁の俳諧に歸依する意志表示として句碑の建立が所在に行はるゝ事となつた。近江栗津の義仲寺藏板『諸國翁墳記』に或は碑を摹寫した圖入りを以

新時代の推移を見る

た	ま	の	天	氣	に	隙	な	駕	昇
し	ば	ら	く	は	燈	の	き	か	ぬ
鶺鴒	で	取	た	る	鶺鴒	毛	を	ひ	く
弘	美	春	湖	芳	泉				

と、こゝには表八句だけを引く。配冊には施主春峰の書状を添へ、それに對梅宇、月之本が文音所になつてゐるから乙彦と爲山が萬事を斡旋したのであらう。

春湖と古池眞傳の板行

新東京は僥倖にも一部を除いて兵燹を免れたが人心安堵しない爲、精神的に芭蕉翁を教化の對象とする新運動が起された。春湖の『芭蕉翁古池眞傳』の頒布もその一つで、彼が後に明倫教社の社長として俳諧教導職となつたのは此書の間接的效果であつた。『古池眞傳』は芭蕉翁と佛頂和尚との問答を脚色して、古池の發句に基く俳禪一味の境地を提唱したもので、所傳の眞疑は問題とするにあたらぬが、三河國寺部の都筑春可といふ俳人の許にその記録が傳來したのを春湖が行脚のをり寫本して携へ戻り、山城興聖寺環溪禪師の東都へ巡錫の時、深川の小筑庵に請じて禪師か

ら此書の着語を得て板行したのである。慶應戊辰八月廿六日とあるから明治改元が九月八日なのでその僅に十三日前である。明治の出板と見做してよい。『古池眞傳』の内容は常陸根本寺の佛頂和尚が江戸深川の長慶寺に轉住となり、舊識の芭蕉翁を訪ふべく六祖五兵衛を隨行してその深川の閑居を敲いた。和尚「近日何有」と答曰「雨過テ洗フ青苔」と、こんな風で問答となり、「如何ナルカ是レ青苔未生前春雨未來前佛」と問尋した時、「池邊の蛙一躍して水底に入る音に」を聞いて「蛙飛込水のおと」と即答したので、佛頂は「珍重珍重」と唱て携ふる如意を投與した上、芭蕉翁の省悟を隨喜する一帋を揮毫したといふのが一篇の骨子となつてゐる。だがそれでは發句の上五文字が定らないので門人嵐蘭が其語を乞ふたところ、翁は「二三子試にこの冠五をいへ」とすゝめたので、杉風は「宵闇や」嵐蘭は「淋しさに」其角は「山吹や」と置いたが「我は古池やとおき侍らんとあるに各あつと感じ入る」と見える。これは支考の『葛の松原』の所説を布衍したものらしい。環溪禪師の着語は全文の主要な個所に残らず漢文で批評的な傍註を施したので、一例をあげると、

△等閑一句動天地
古池や蛙飛込水の音

△賛歎有録

妙なるかな妙なるかな、爰に俳諧の眼

△見來瞎漢々々

ひらけて天地をうごかし、鬼神を感じ

△蛙聲咄々有何奇異

しめぬべし。

といふ風のものである。右の本文は『眞傳』であつて傍書が環溪の着語である。菊本氏藏、芭蕉翁所持の如意に表は「遊行無意如獅子王」裏は「應漂遊風土桃青霈」と認めて「雲岸野衲佛頂書」とあるから、如意を佛頂から授與されたのは事實だが、此の如意を古池の吟に附會する説は信じられぬ。『古池眞傳』の内容に就ては批評の余地があるけれど、此書を板行した春湖が一朝にして名聲を高めた所以を思へば、眞傳の出版は明治俳諧史の一頁に擧げてよからう。句碑の建立は地

方的の營みに過ぎないのに對して、春湖の此の教化的な企ては遙に賢明な手段に出たものと云ふべきである。

東海道行脚と十州紀行

明治早期の交通の不備と兵馬の往來は旅人の安全を妨げた。行脚生活の俳人は不安な旅に怖へて契史の『十州紀行』が板行される前には旅行記らしいものを見受けない。『十州紀行』は契史が春湖を誘つて東海道を旅行した紀行で「東京を出るは八月十九日なり」と本文にある旅出の日は明治四年であつた。春湖は椿齡を伴つて先に行き、契史はそれから四日遅れて佐野の連水亭で追つた。見附から先は契史の旅疲れて春湖が代稿してゐるので全篇春湖の紀行と見てよい。此の紀行に春湖が亡友蒼山の追善俳諧を張行したのは不思議な宿縁であつた。春湖と蒼山とは播州加古川で『古池眞傳』の着語を書いた環溪禪師に同時に參禪し、名古屋を基點として關西、四國、九州を旅行して安政四年『雲鳥日記』を著して以來の親友であつた。それがはからず遠州安間の木潤亭で蒼山の追善會式に列し、菩提所普傳院で連衆着座の上正式の俳諧を張行したのである。

春湖その事を記して「おのれ居士と莫逆の故あるをもて來りて此遊に預る」と往時を省み

爰許に其まゝ月のあるじかな

春湖

の吟を手向け、契史は蒼山門で「師の意にたがひしこと四歳、靈前に佗言の兩袖をしぼる」とあるから、或は前以て追善出席の打合せをしてあつたのかも知れない。豊橋から伊良古崎一見の杖を向けて畑村の潮音寺に、「笈の小文」の旅に越人を具して芭蕉翁の杜國を慰めた舊蹟を訪ひ「三里の浦傳ひして伊良古に到る」とあつて、その景觀を「いらこ崎は鳥の啄を伸て伊勢志摩の島々をついばむに似たり」と形容してゐる。それより名古屋に赴いて十一月十四日東京へ歸杖するまで前後三ヶ月、旅行の範圍は東海道を出でなかつたが、旅中至るところの知名俳人を歴訪してゐるので、此の時代地方的に一家の風格を備へた人々の分布觀とも見られる記事がある。三島の驛から佐野に入つて「故人連水を訪ふ」と題して

このもしき宿や花野の瀧に入

春湖

とあるのは瀧の本連水であり、遠州笠井の塘雨亭で引見した人々中に十湖と見えるのは、賣名の行爲を賤しまれたが七十二峰庵の號で近年まで舊派に勢力のあつた松嶋十湖の事である。豊橋

の驛に吳井園を叩て」といふ吳井園は東京へ出ても大家格に扱はれた卓池門蓬宇の庵號で、伊良古崎へ春湖を案内したのも此蓬宇であつた。名古屋の士前は永井氏である。梅裡は大橋氏清遠舎と號する沙鷗門人である。今一人暮雨亭而后と共に尾張の三大家と稱されたが、而后は既に故人となつてゐた。此『十州紀行』は春湖が中心となつてゐるが、文献資料に乏しい明治初期の地方的俳壇事情を研究する上に役立つものである。

八巢謝徳の畫像人名録

傳記資料として人物の分布を窺はれる程度の『十州紀行』などより遙に效果的なのは『萬家人名録』正續の如き浩瀚な書ならずとも人名畫像録の類である。大衆的に個人々々の名録を板料負擔の條件で募集するのは、文化的事業の頓挫した此の時代には完成を期し難い仕事だが、明治三年八巢謝徳が『俳家畫像人名録』を出版した驚異的な成功を紹介して置きたい。謝徳は昭和三年の秋百年忌を行つた八巢蕉雨の三代で、此書を編纂するため爲山、春湖、等裁等の賛助、後援があつたといへ、大衆俳人三百餘名を収録した苦心を察してやらねばならない。等裁の序に

歴縁對境の名利は發すべき也とは聖光上人の古語にも見へたり。今此冊子や畫像をさへ入て現在俳家の人名録をものせばやと、社友誰彼のすゝめに圖りもの好る八巢老契のはやくも諾してみづから塵を布かるゝものから、日ならずして遠近、序よき好士達より飛せ來たる吟藻やがて二百輩にも滿けるよろこばしきもあながちに利養に奔るにもあらず、唯風流便利のための趣意なるをかく速に成れるは面目也と、心友茶話の子が禿辯のまゝをたゞちに序詞に換ふとなり。よしや夫も風雅當調の輕みにもかなふべきならむかし。

等 裁 識

と感嘆せるも過褒でない。尤も凡例に「其人々の俳に似たるは稀成べし」と斷れるごとく、畫像必らずしもその人の寫眞に近いとは云へない。大方は士農工商の階級別及び男女老少の別によつて想像的に描いたものである。體裁は小菊の用紙のうへに散らし書に發句と作者を記し、其のしたへ略畫ながらその人らしく似せた畫像を配して、小さく輪廓を圍ひ、住所、氏名を録してあること全篇同一様式である。畫像中で東京の桂花園桂花、潭堂得水、三河の吳井園蓬宇、松前の蓼窓一鼎などすこしは存在を知られた人物もゐるが多くは八巢一派の無名俳人である。桂花は

『太陽』の明治十二傑で十二俳仙に當選して名高いが、これで見ると謝徳の門から出て漸次俳壇的に名を知られるに至つたものらしい。又大家格の宗匠は畫像を省いて各自筆の發句を摹刻し、二三枚づゝ畫像の閒々^{い。}に挟み込みにしてある。酒雄の序に「一日八巢を訪ひしに虫干にて、祖翁のみちのく行脚に持給へる硯^{うら書}、曉臺^{うら書}、朱樹叟の遺稿日記、諸家の句をとめられし冊々、すべて蕉雨老人へ授與の品、又老人の遺艸等ところ狭しとひろげたるが、一として紙魚のあとだになし」とあるから謝徳は事務家肌の几帳面な性格で、かうした煩雜な編纂をするに適した人であつたらしい。

連句の衰微と其潜勢力

春興の三節を以て連句の衰微時代を代表するものと述べたが京都の九起編『俳諧新苑集』の如き天地人の三冊悉く連句ばかりのものが、明治改元の慶應戊辰の奥附で板行されてゐる程で連句の潜勢力を無視する事は許されない。併し同じく戊辰仲秋の奥附ある一庭の『さむしろ』といふ集は「今年皐月十五日燹火の災にかゝりて家はさらなり衣類調度みな烏有と成たるを」やうやく

の思ひで草庵再建の祝ひに出板したのだが、全篇發句のみで一巻の連句も載せてゐないのは時代の推移を語つてゐるかと思ふ。こゝでその論は省くが、連句は既に衰微の傾向が見えたとして、果して此の時代の連句はどんなものかを察知する程度の作例を次に掲げる。

杜水の『いまのそり』は明治二年、尾張の梅裡、三河の蓬宇、甲斐の嵐牛と催した歌仙四巻を収めた冊子であるが、一巻としてよりは寧ろ二句の附振りに技巧の洗練さが見える。

前髪の反も涼しき寺小姓

梅裡

窓から洩る木缺のおと

杜水

膏藥のきゝめは見えし一枚に

梅裡

手形の金がいまにわたらぬ

杜水

吹革しめせば上張を脱ぐ

蓬宇

雪國も一日ましの春ごゝろ

羽洲

かざす手はうしろへばかり灯のきゝて

杜水

草履を陸へ投て出る船

蓬宇

殊に最後の「かざす手」の附合は呼吸がびつたり一致して動かない。巻中の秀逸と評してよい。

ノ左の『古稀筵』は『俳諧一覽集』の著者で何丸門の信州更科のノ左が、明治三年その古稀祝ひに配本したもので、その中に歌仙が二巻ある。一句として取離して見ると、

もち甲斐もなき旅の銀さつ

見柳

藩札の下落する一方の時世相を反映したものや、また

生顔をそつくりうつす硝に

ノ左

古風な硝子の寫眞を驚異したその頃の氣分があらはれた句振に興味を覚える。が

あらたになりてよめぬ御傍示

ノ左

雨ざれた大材木の船になり

桃壽

の如く附け方に異色ある作の乏しいは是非もない。

技巧は前代に劣らない

春湖に従つて明治三年の秋から暮まで東海道を漫遊した椿齡は『ちなみ草』の題で、翌四年の夏旅中の歌仙三巻を冊子にあらはした。契史の『十州紀行』の前年である。その中には

扇折手際も店のひとかざり	舒堂
時計にあはぬ城のうち出し	三奏
くるくると巻て短き鎧産	春湖

のやうに、三句の渡りに城下町のおだやかな氣分を描寫して、湯をのむやうな發句の平板さとは別人の如き捌き振りが見える。

そよりともせず只霞む也	椿齡
蕨縄漬た水よりぬるみたち	春湖
上張脱げばのうくとする	椿齡

これも用語は舊套を脱せず甚だなまぬるいけれど、田家の春の情景が俳句の境地とは別個の技

法を以て巧みに表現されてゐる。擧句を見ても

投かけ橋の西日かげろふ	旭薺
-------------	----

の寫生的で一句としての緊張を持つてゐるもの、及び

いづこ踏ても芳しき草	蓬宇
------------	----

ありふれた句躰ながらこれにも連句の特徴としての隙のない言ひ廻しに傳統的な「味」を見せてゐる。

如白の『青空集』は亡師氷壺の雙雀庵を嗣號した彼が、明治四年師の追善に出版したので協起し二巻、外に四歌仙を掲載してゐる。

御門主は乗ものなりの御小休み	紫梅
賤の子どもの砂なぶりする	尾曠

軒先にいつうれるやら釣わらぢ	漁藻
----------------	----

新時代の推移を見る

毫ては犬の人もおどさぬ

黙池

儉約札のへげる雨もり

黙池

隠居する所見たてに歩行るゝ

漁藻

など二句間の交渉に冴えくした手腕を示してゐるが、一句としての技巧には

玉にまとめる紙の縷だめ

華兄

の無所在の體屈さがこよりを擦る人の動きにあらはれて居るものや、

仕つけのまゝの夜具を持込

如白

急の客人か、さなくば祝言か、忙しい家の風情がその仕つけのまゝで領させる老練なものがあ
る。

尾正の『あさりつと』は明治四年の士前の序があつて、名古屋の作者の五歌仙を擧げ『いまの
そこり』に似た體裁である。

見ちがへられた人になり居る

尾正

おはしたの又こぼれ出る御錠口

士前

鉢をそへて盆の水仙

杜水

行通ふひと閑くの置手燭

嵐牛

糶まくかたへおとす吹井戸

嵐牛

みめぐりの鳥居は花に埋れて

杜水

颯子をひく八專のあき

蓬宇

藏番の欠伸に下がる米相場

尾正

これらの二句間のうつりを見ると元祿の連句にもをさく劣るまいと思はれるが、一卷として
纏まつたものを批評的に見ると俗に過ぎて低調、指合ひ及び去嫌の約束に囚はれて、自由に伸び
る創作的な力が抜けて了つてゐる。一卷の調子がたるんでゐる。連句の下り坂になつて行つたの
は無理でない。

俳人の動きと新分布

明治新政府は堂上及び地方の新人物を以て建設された。新東京はその政治的背景として奠都の成功に輝いてゐた。東京へ、東京へ、人材は擧げて東京へ殺到した。舊江戸人は勢ひに吞まれて屏息した。でなくば静岡へ移封された舊將軍と同じく地方落ちをした。此渦中に俳人の雑糅したこと勿論である。新舊俳人の移動及び分布に關する問題がこゝで必然的に提出されなければならぬ。

新しき色彩の東京座へ

『俳諧鑑』に何々座と稱した點者は一時悉くその影を没した。舊江戸の俳壇的に一致してゐた江戸座は解體した。東京人の今以て好事的に愛好する江戸趣味の氣分を俳諧の上に、江戸座の洗練された洒落とその人情味とに求める傾斜の世界にだけ其の名残が漂つてゐた。その世界を泳いで

成功した者は舊江戸座の永機である。永機には旦那があつた。旦那といふと語弊があるが幫間的のその言葉が香以と永機との間柄には甚だ適切にあてはまる。永機の旦那香以は前にも書いた山城川岸の津藤といふ大通人だ。初號を鯉角とよんで可布庵逸淵の門に俳諧を學んだが、江戸座に財を投じて、若くて伶俐であつた永機を愛した。永機の『樸口集』にこんな跋を書いてゐる。

わが深川座の俳諧は流行日々に新たなる事、舊きを捨て新きを迎ふる花街の趣に似て、虚中に實をこめ手れん手くだの句作をむねとす。されば見かへり柳を契情の賢なるにたぐへて、先師も戯れ給ひけらし。そもく四時の風光に紋日節句の趣を兼れば、歌仙の一順は摠一座の客に似て、發句のたけ高き體はお職のおひらむたるべし。脇第三の作法つゝましげなるは引ツこみの突出しの如く、しめやかなる場を引つたつる世話句の出戀はけんばむ藝者の賑はしき姿にひとしく、神祇釋教戀無常すべて遊里の心ばえあらざるはなしとて、此道のわけしりと呼るゝ永機ぬし、こたび初會の約束をたがへず、裏なじみの集冊をつゞりて流行に遊ぶ俳諧の通家に贈る。おのれ此人のあほりに乗て一座のつき合に其趣を一寸しるす。

梅堀香以 七代目
横窓

これでは俳諧は娼家の風俗の反映にすぎない事になる。御一新に至らずとも江戸座の没落す可き運命は目に見えてゐる。香以のいふ「されば見かへり柳を」とは蓋し「傾城の賢なるは此柳かな」の其角の句をさしたので、「先師も」は深川座が其角を崇拜する湖十系統であるから其角の敬稱である。「樸口集」は嘉永六年の刊本である。香以の序に見える頽廢的趣味はすでに、時代錯誤である。永機は深川座の看板を早く撤去して、新東京の通人趣味に肩を代へて了つた。彼の旦那香以は落魄したけれど、周囲の人間で伶俐に立廻つた阿心庵の是佛や大黒屋の蝶舎秀民、九代目團十郎の三升の如き通人と芝居者の派手な後援者があつた。永機の立場はいはゞ舊江戸座の看板を新しい東京座の色彩で塗替たやうな者である。

江戸座及び雪門の傍系

江戸座の一分子である梅翁流の左籙改め古常は、門人中から逸志、佳風、寶馬、五璉の古名相續者を見立て、判者とした上、明治三年には二世素外なる者に一陽井の號を允許したりして、江戸談林の家元の如く見られ、『俳諧鑿』時代を明治に再來せるかのやうに想起させるが、孰れも見掛

倒しの判者で俳壇的に存在をみとめられる筈がない。たゞ門人帖を見ると七世雪中庵となつた雀志の名など載つてゐるので、無教養の山師的の仕事でもなかつたらう。江戸座に對峙して勢力のあつた雪門は、宗家の雪中庵が靜岡へ移封された舊將軍と共に落延て、後事を托さるゝほどの人物が居なかつた。雪門の傍系として東杵庵三世の願言、雙雀庵二世の氷壺が残存した位である。願言は俳諧本草學者で知られる樺柯坊空然の嗣子で、下谷徒士町で醫者をいとなみ、おや譲りの忍川巢連を支持してゐた。門人の月彦が俳壇的に進出して後年幹雄と競争的に俳諧教導職に及第した。氷壺はその師の爲『禾葉七部集』の編者の一人となつて歿後嗣號したのだが、同門の文哉と『俳諧問答』及び『俳諧龍雀』の論争をかさねた。此争ひは『俳諧破魔弓』を出したのみで中絶したが、氷壺は兩國若松町に住んで繁昌した。太白堂の六世孤月は舊幕の旗本で食祿三千七百石の家柄だが、年八十で老衰の風なく赤坂丹後坂上に庵を構へてゐた。出世して御金藏奉行を勤めた小嶋父々は遊俳ながら、百韻四五十巻を常にたやさない達人であつた。惜しい哉新東京の空氣に觸れず故人となつた。關東蕉風の道彦系統では藻魚庵大蟲と菊守園見外が有名であつた。大蟲は卓朗の門人で此時代奇特な俳諧學者であつたが、いちと呼ぶ若い妾を持つてゐてそれが人々

の口を賑はした。いちは大蟲が死ぬと薙髮して採花尼と號して男性的な氣概を以て知られた。見外は甲斐の者で『近古二十四歌仙』で連句の技倆をあらはし、日本橋の本町二丁目で點業を開いて明治に及んでゐる。護物の門人である。同じく關東蕉風で頑布の系統となるみき雄は、安政元年二十六の時西馬の名聲を慕つて磐城から江戸に來た。西馬の『標註七部集』を元治元年板に起して篤學を稱されたがその頃は潛恣と號してゐた。みき雄は鬱勃たる野心を持つてゐたが俳壇人として活躍したのは、明治七年教部省から俳諧教導職に補せられた以後である。系統ははつきり知れないが不可得庵不染は『流行百家發句集』の作者である。嘉永四年一事百古が公平に見て代表的俳人の句を記録した本だから不染の位置を推知される。此人も明治に入るその年歿した。下谷新寺町の吉祥院住持であつた。前に初夢の争ひに書いた五休は蘆明庵と號して安政二年の『古今俳家墨跡』の手鑿に載つてゐる明治以前の俳人で、新吉原に生活して頽廢的な江戸趣味に染まなかつた。由誓門人である。『俳家畫像人名録』の編者である八巢謝徳は自筆の句日記『白雪集』を見ると、一ヶ月に七八名の新入門者があつて點料の餘剩を廻して小金貸をしてゐた。本姓をすて、三世を嗣號した八巢を氏とした。日本橋伊勢町の住人である。

三大家の人格と親和性

新東京の俳壇をその背後におの／＼負つて鼎立した三大家、月の本爲山、小築庵春湖、佳蜂園等裁に就ては、最初に一通り傳系を紹介して置いたが、俳人分布觀を記述するに際して省略を許さない重要な人物なので、重複を來さざる二三のことを記さう。爲山は三大家の先輩であつた。梅室から梅花正風園の扁額を附屬されたのが天保十四年である、祖郷の『近世俳諧十家類題集』に十名家の一人に推學され、その師梅室及び蒼虬、鳳朗等と同格に扱はれてゐるので一廉の名望家であつたことが知られる。明治に入つて俳壇的閱歷を高く景仰されたのも理由のないわけでない。春湖は甲斐の嵐外門人である。二十三回追善『天のちり』の序に「甲斐の國に風雅を言ふ者、そのかみ六庵によりて學ばざるはすくなくなんありし。ひと度扉に履ぬげる人は其師風の篤きになづき、教に化して益をうけ恩を荷ふものいよく多し。六庵の人となり又しんぬべし」と敬慕してゐる。六庵は嵐外の庵號である。春湖が嵐外に就學したのは暫くで、二十一歳の時江戸に出て禾木園禾木に師事した。禾木は『今人附合集』の編者で巨椋氏、春湖を引立て、遂に髮を剪ら

せ遁世的俳人とした。春湖旅を好んで全国を行脚し。師禾木の訃を聞いて急遽江戸へ戻つた。夙に一家の風格を備へて明治早期爲山につぐ人氣を持つてゐた。等裁は八千房淡叟の門人だから大阪で俳人となつたのだらうが、慾のない恬淡な人物で、佳峰園の音をもぢつて時の人阿呆園と酷評した位である。維新前の位置は『古今俳家墨蹟』にその筆蹟を掲げてある以外特別の記録を存しない。爲山、春湖の如き傳統上の背景がなく三大家の一人に推されたのは隱逸者の人格に人々の敬服した爲であらう。此三大家は五角の聲望で鼎立したといふものゝ、鼎の三本脚のやうに三人の力で俳壇を頭上に擔つた意味で、決して排他的に争つた結果を稱するのではない。爲山は春湖を侮らず、春湖は爲山を嫉まず、等裁は二人に隨伴して互譲的に親和してゐた。殊に爲山は桶町二丁目に、春湖は佐賀町一丁目に、等裁は北新川丁に各一庵を構へて、互の區域を犯さない地盤の協定さへ行つてゐたかに見える。爲山の門から出た對梅宇乙彦がさうした斡旋に適當な役廻りを勤めた。爲山門の太年、素水、春湖門の青宜が乙彦と共に當時の中堅分子であつた。太年は藤庵、素水は後月の本を嗣ぎ、青宜は茶竹堂と號した人達である。明治元年から四五年に涉つて出版された集冊にその名を記録されるその他の俳人で、現在庵露心、稻掛庵萬古、旋無畏庵甘海、

栗庵宇山、行庵酒雄等を新東京人として擧げてよい。萬古は『流行百家發句集』に見え、甘海は未足の初號の方で聞え、宇山は後嶋立庵十三世となつて知られた程度であるから、俳號を備忘的に記して置くだけで十分だと思ふ。

統一的京都、雜居的大阪

京都の俳壇は常に光輝ある傳統に支配されてゐた。永く花の本を稱した蒼虬の一門に悦服して他門の窺偷を許さなかつた。剩へ東山雙林寺の芭蕉堂の代々を掌握したので、蒼虬一門は偶像的に崇拜されてゐた。梅通の次代花の本となつた伴水園芹舎、芭蕉堂公成、朝陽堂九起、古終舎黙池等の年表的に明治へ籍を置く人物は孰れも蒼虬の直弟である。芹舎は攘夷黨の横行する元治元年二條家から花の本號を允許されたが、明治中期に及んでその聲望を頂點に高めたので、御一新の直後はさして聞えなかつたとはいへ、『伴水園句集』が元治元年板行されてゐた程だから虚位を擁した譯ではむろんない。公成は爲山が『流行百家發句集』に序して「百古叟は周防の國よりはるはるとうちひさす都の花に遊び、雙林寺なる芭蕉堂に居て」と云へる編者百古の改號である。師梅

通の一事庵を嗣ぎ遂に芭蕉堂五代の堂守となり南無庵の六世を名告つたが、勤王黨の一人として時事に奔走した爲刺客の白刃に仆れた。だから正確には明治のいきが掛つてゐない。黙池は『袖珍鈔』の編者である。此書は梅通の序に「祖翁が一代の俳諧の満尾せるものを撰み集め、しかも一卷を一瞬に見わたし、一部を袖の内に納るたよりありて、閱るに全蕉門の格を知り月花の活動を悟るの要書也」とあるが、窃に材料を『一葉集』に仰いで簡便な携帯用とした芭蕉全集である。黙池の存在は此『袖珍鈔』の著あるによると稱してよい。大阪は京都と俳壇事情が違ふ。炭俵蕉風に對抗して起つた『俳諧種瓢』の點者が蔓つてゐた。梅室と争つた天來の發企で貞門、檀林、蕉門の三角同盟を行つたが、實際の傳統ではなく系圖を勝手に拵へて、貞門だ檀林だと名告つて點料の規定に最もよく一致してゐた集團である。明治に涉る代表的の點者には花屋庵鼎左がある。芭蕉翁終焉の由縁ある花屋裏に奇淵の結んだ草庵を引繼いだのだが、梅左の『松のしげり』によると安堂町御堂筋西へ入所がその花屋庵の所在地であつた。だが天來が敗殘者として天保山沖に投身してから、梅室系統の俳人が闖入者の位置に立つて流行した。茶飯堂蟻兄及び松の本素屋がそれである。蟻兄は梅室の門人である。後の貴族院議員で舊派の連句に名のあつた桐蔭鳳羽をそ

の門から出したが、鳳羽は初め天來に師事したといふから、再び蟻兄に就たのは豹變者だと難する者があるかも知れない。それだけ蟻兄に徳望があつたのだとも云へる。素屋は慶五庵貞瓊と號した時代があるから、淡々系統の一人で梅室の名聲にあぐがれて入門したのだらう。黄華庵南齡は本町實相寺の住持で明治中期に聞えた宗匠である。其師白涯が天來同契の點者で『松のしげり』に見える。師の歿後早くも大阪俳壇の水上線に出たのであつた。

北越から東海道を廻る

京阪から以西は政治的に動搖してゐた結果か世間的俳人の出現を見ない。周防の徳山に篤學者曲齋瓢子が『七部婆心録』及び『貞享式海印録』を著述して蕉門俳諧の新解釋を試み、その批判的態度が美濃派の固陋な説と容れず、宗家から破門されて屈する色なくいよ／＼筆を呵しつゝあつた。曲齋の意氣は

知_ニ汝_ニ著_ニ書_ニ意_ニ欲_レ回_ニ元_ニ祿_ニ風_ニ誰_ニ能_ニ題_ニ秀_ニ句_ニ應_レ若_レ哭_ニ蕉_ニ翁_ニ

俳人の動きと新分布観

明治七年甲戌孟秋念七日

此自像に題した無技巧の一詩を見ると感動的な強い力に撲たれる。曲齋一人を除いて中國及び九州には傳ふべき人物がないので、筆を轉じて北越に向ふと、加賀に槐庵大夢、句空庵雪袋、越中に半雪居野鶴の三人を發見する。大夢は金澤の人、梅室に師事して馬來の後中絶した槐庵を『梅室翁紀行録』に「三月加賀の大夢上京、宗匠命じて槐庵を繼しむ」とあるから、天保四年師命によつて嗣號したのだ。著書に『千代尼句集』および『掌中梅室發句集』等がある。雪袋は同じく金澤の人で梅室門である。蕉門句空の人格を慕つてその庵號を繼いだのだ。葵園舎悠平といふのが初號で明治二年の刊本『夏書はじめ』に「見わたしや案山子ひとつに日の當る、悠平改雪袋」と出てゐる。野鶴は高岡の人でこれも梅室門である。同國の因縁で井波の蕉門浪化に私淑し『浪化上人發句集』編輯に造詣を示し、野鶴は名を此一書で殘した。大衆的といふと、俗に媚びた事となるが名古屋の士朗の人氣は偉いもので、明治に入つて一向衰へない。朱樹會は今以て續いてゐる。而后、梅裡、士前の三人は士朗系統なるが故中京の大家と稱されたのである。而后は早く歿した。梅裡は清遠舎、沙鷗の門人だから士朗には孫弟子である。梅室、梅通と共に『三梅發句集』

といふ外題で梅裡の句が當時喜ばれた事が解る。士前は一撮園、名古屋に住んでゐたが、鳴海在の者で竹有の門人である。小説家永井荷風は其裔になると聞く。文學的血統は争へない。羽洲園羽洲は舊派棹尾の作家として近年まで生存したが、十五歳で士朗系統の芝石に入門した爲、若年で集冊に名を伍して俳壇的生命を長く保つて來たのだ。伊勢の生川春明を忘れるところであつた。春明は職業俳人でないが、俳諧考證家として『誹家大系圖』を編成した點で記録しなければならぬ。伊勢は津の藥舗である。三河は吉田の吳井園蓬宇が此時代に交渉を持つてゐる。卓池の門人で、江戸へ出て點料貳百兩を稼いで國へ戻つた逸話がある。遠江の嵐牛は蓬宇と同じく卓池門である。同國見附に假寓した摩訶庵蒼山は羽前の人で江戸の風外及び梅室に隨ひ、見附にうつり住んでこゝで物故した事は『十州紀行』の筆序でに記して置いた。明治早期の行脚俳人では最も傑出した人物と稱される。

舊幕臣と静岡及び關東

駿河の静岡は新政府へ歸順した舊將軍の封を削られて、謹慎的にいとゞ緊縮生活をしてゐた士

地である。舊幕の士人で反抗力を失つた者は食祿にありつけるとも限らないのに、皆な東京から引越して來た。雪中庵推蔭及び白兎園宗瑞の如き由緒ある俳諧の家元で、幕臣なるが故に新東京を落延びてきた者もある。雪中庵は蓼太の慧眼で雪門の地方發展策として靜岡へ目をつけ、時雨窓を置いて月巢を目附役とした舊縁があつて好都合であつたらう。併し推蔭は對山の時分裂した雪門を支持する力がなく、代々の什物を靜岡で過半手放したといふ噂が傳つてゐる。宗瑞は杉風系統で初代が『五色墨』を起して江戸座に拮抗した時代もあつたが、此時の宗瑞は九代目で老人でもあつたしするから、新地盤を駿河にきづく氣力はなかつた。靜岡へ移住した俳人で再び歸京して名を擧げたのは一具庵尋香である。尋香は初號を時雨庵素良と呼んだのだから、雪門の一人で一具生前の直門ではないらしい。『斷橋思藻』と題する一具の句集を見てもその名は載つてゐない。『對梅宇日涉』には「駿藤エダ」として尋香の句があるから、藤枝に住んだ時代もあつたのだらう。沼津の種玉庵連山も著名であるが、門人の瀧の本連水は伊豆の豪家で邸内に簗毛の瀧があり、東海道假名關所かたと稱して連山より寧ろ一枚上に扱はれてゐた。信濃のノ左に關しては『古稀菴』を引いて前回に一寸觸れた。何丸の門人で號は來禽亭である。その著『一覽集』は一茶の連

句を手録してあるので研究者を喜ばせる。俳諧年表の嚆矢といふべき『俳諧年代便覽』の著者寥和の門人が同じく諏訪の文豊齋寥左である。『五色墨』の系統の亡びなかつた點を奇異に思ふ。寥左の『俳諧三千題早引略解』は前に解説した。『一茶一代集』の著者俳諧寺可秋が明治早期の俳人だつたと知つて意外に思ふ人があらう。水内郡神代に住居したが俳諧寺の二代を誰から嗣號したかゞ疑問である。一茶の關係者では『おらが春』を出版した白井一之が存命するから此人と交渉があつたのか。上野では西馬の一門が進出してゐる。一簾居葉堂は『流行百家發句集』に早く紹介された作家で吾妻郡大戸の人である。蘋亭かつみ及び橋山居桑古は幹雄の同門擁護によつて後に一家をなした。上總の人として隨巢羽人が知られる。『七部十寸鏡』に杉風の説を傳へた考證家一叟の門系である。貞翁の追善『寒念佛集』の跋に「東都淺草なる三好のちまたに住る隨巢のあるじ羽人」とあるが、萬延元年の刊本なのでその頃江戸へ移住したのであらうか。下總の靜堂月杵は嘉永元年江戸へ出て西馬の門に入り、明治時代には蠣殼町に寓居したさうだから實際その國に居住した人と云へない。卓朗門人の秋江庵釣月は行徳堀に住んでゐた。下總の俳人には此釣月を擧げた方がよいかも知れぬ。

北門の尖端に光る殘燈

新東京を圍繞する武藏一國を通じて不知庵寄三、有磯庵五渡、寶雪庵可尊が最も門戸を張つてゐた。寄三は中瀬川岸の人で逸淵に師事した。その著『七部集連句早見』は蕉門の本格的約束を見通し得、入門的に簡便なものであるが幹雄は此寄三に依て啓發されたのだ。五渡は妻沼の農家で梅室の一門である。環溪禪師の賛に「文字十七、風流一蓑、于花于月、何釣奇多」とあるやうに釣が好きで釣々翁と號した。爲山は五渡の人物に服してゐた。可尊は戀ヶ窪の人で嵐山の門から出てその寶雪庵を嗣いだ。牛込に移り住んで千畝の初學の師であつた。東京以北には陸前に一日庵江三が存命してゐた。江三は芭蕉翁の從甥といふ也寥禪師の遺物を發見して『むつのゆかり』を著作したが、傳來に不審の點がある。出羽には桃岡庵玄子が永年の雲水から戻つて長井に閑居した。一具の門人である。羽後の弄月園陰風は名古屋の羽洲と併稱された明治後期の舊派俳人で、御風の後繼者であるが、此の時代からぼつ／＼世間に知られ出した。海峽を越えて函館には孤山堂無外が卓朗の正統を傳へてゐた。且同門の大非居葱玉が五稜郭の工事を請負つて在住した

上、新政府に抵抗して脱走した舊幕臣の俳人もあつた、揚本武陽の麾下に屬し官軍の五稜郭に迫つた時、千代ヶ岡で父子三人討死した中島木鶏もその一人である。悲壯な「郭公我も血を吐く思ひかな」が彼の辭世であつた。無外は蚊雷庵雪耕と號した水戸の人であるが、卓朗の歿後大蟲の斡旋で孤山堂三世となつた事は前に書いた。亡父錦風居士が北海道へ赴く時、四世金羅から「腹ふくらして來る雁金ぞ待れける」の短冊に添て、無外宛の紹介狀を貰つたが、遂に逢へなかつたと残念がつてゐた。岡野知十が函館で新聞記者をしてゐて、無外の遺書一切を手に入れ東京へ持つて來た。それが貞門、談林の稀觀本に充ちてゐた話は有名である。惜むらくは知十の手を離れて殆んど散佚したと聞く。函館には別に乙二系統の斧柄社があつた。布席から草摺へさうして北涯へ傳統したが、北涯は明治元年福山の光善寺住持となつたので、無外、葱玉の卓朗系俳人がそのあとを襲つた譯である。江差の蓼窓一鼎も逸する事ができない。北海道は私の第二の故郷である爲め肩を持つのでない。知名の俳人の多かつたのは政治的にこゝへ追ひ詰められた舊江戸の武士階級が潰滅したと同じく、俳壇的に新舊時代の交錯期に古きその殘燈が、北海道の尖端に於てこれらの俳人の手で一時的の閃きを見せたのだと解すれば、そこに寓意的な或感懷をさへ覺える。

それも明治二三年までの瞬間的の現象ではあつたが――。

時代の姿と歩みと傾向

新東京の建設された明治元年から三四年に涉つて、舊江戸の延長とも見られる新舊俳人の動き、及びその分布観を當時の文献に徴して以上略述して見た。關西に比較して關東に俳人の集注されてゐるのは、政治の東漸と共に時代の姿、歩み、傾向を俳壇的に象徴してゐるかの如く見える。關西には既成俳人が凋落して其名跡をつぐ人物がない。俳諧のごとき遊閑文學に志すよりも華かな政治的登龍の門が彼等の手で至るところに開かれてゐる。有爲の人物は孰れもその方に向つて進んだ。關東人には新しい登龍の門は悉く時代の敗北者として塞がれてゐる。俳諧を好む者はそれで暫らく鬱を散じてよけいな野心を起さない方が賢い。地方の宗匠もその潤ひで生活して行けた。況んや東京は俳壇の閑は全く滅びて、誰だらうが力量さへあれば自由に偉くなれる時代であつた。新俳人の輩出したのは當然である。甚だ大ざつばな見方であるが、かうした事情で關西より關東により多く俳人の集注分布されたと解釋してよからう。

こゝで再吟味を要するのは俳人の集注分布の上に現はれた新時代の姿、歩み、傾向に就ての觀察である。西から東へ漸進的に動いて來た俳諧は遂に新東京時代を現出したが、その間に一般文學の移動とは同一視されない事情が存在する。俳諧史より見て貞門は京都に、談林は大阪に發生流行したのは争へない事實であるが、蕉門は地方的に發達してそれが江戸へ、さうして京阪へ、其勢力を開展させ又は逆行させたのであつた。全俳風の蕉門に統一された以後と雖、その支配權を江戸が地理的に握る順序となつたのでない。地方は地方で蕉門の傳統をそれ〴〵の指導者があつて支持してゐた。その結果地方は江戸と同じく分權的に相對抗したのである。文學封建の時代といはゞ云へる。明治時代は東京を以て俳諧の中心的權威の所在として、地方的の勢力を否認したといふよりは無視したと稱してよい。政治上のそれと揆を一にしてゐる。地方俳人の没落は一には俳諧の衰微による事もまた拒み得ない。俳諧は要するに遊民の文學である。遊民の語はよし侮蔑的の暗い影があるにせよ、芭蕉翁の老莊思想に徹したあの高踏的態度が既に遊民の生活理想である。一茶が遊民々々と賢き人に叱らるゝ深刻な生活苦を叫んだのは、確に遊民に疑ひない社會階級にその身を置いたからであつた。維新の精神に向上しつゝある此時代、遊民の生活を許容

する筈がないから地方的に俳人の没落となつて、東京に於ても俳人は一般的に屏息してゐたであらう事を此の分布觀を通じて考察される。かれら俳人の社會的歩みは頗る緩慢であつた。第二期の明治五年以後となつて文明開化の社會相に接したが、意識的にこれを回避して花鳥風月を題材とする事のみを風流生活と信ずる隱逸的な態度を省みる處がなかつた。たゞかれらが絶対信條として來た季題の觀念が、新曆の採用とその頒布によつて根本的に覆された爲、そこに一脈の新生命が動いて季寄の更改と共に、俳諧の教化運動に向ふ事となつたのだ。俳諧明治時代の第一期はこれで筆を擱くこととするが、年表的に此時代に歿年を記録される人物でやゝ注目を要する者の俳壇的閱歷及び俳風を次回に再論して見たいと思ふ。明治元年に故人となつた者悉く明治時代の者とはいへないが、慶應より明治に年代的に推移する過渡期を代表する意味で、これを便宜加へるつもりであるからその點をあらかじめ了解して置いて頂きたい。

早期俳人の個人的考察

明治時代は詔して江戸を東京と定めた慶應四年七月以後でなければならぬ。然るに明治改元はそれよりやゝ後れて同年九月である。此不一致を史家は慶應は同三年に限り、明治と年代的に劃一線を引く事によつて解決してゐる。それ故慶應四年故人となつた者はみな明治元年に編入してある。前回「明治元年に故人となつた者悉く東京時代の者といへないが」と注意した疑問はこゝにある。たとへば新分布觀に擧げた不可得庵不染は明治元年五月の故人であるが、正確にいふなら五月はまだ慶應のうちで、東京となるには三ヶ月、明治に入るには五ヶ月早いので過去人として除外すべきだが、それではあまり事實にとらはれ過ぎて系統的記述を妨げる。やはり明治元年故人となつたとして置いた方が考察に便宜であるといふ決論に導かれて、過渡期を代表させた點を再説し、不染と同年の芭蕉堂公成及び墨羊齋父々、摩訶庵蒼山に對する同一の誤解に備へておく。

僧と武士の不染と父々

不可得庵不染は淺草新寺町の吉祥院住持で釋心光と云ひ、別に逃珠堂、觀蓮子の俳號を用ゐてゐた。嘉永以降江戸で屈指の流行俳人であつたが職業的點者でない。慶應二年板の『名所發句集』は編者芳泉に力を添へて完成させたので不染を校者として掲げてある。常に旅行を好んで關東及び近畿の名所はあまねく曳杖してゐるが、高野山に

登山して拔齒を納

落るまゝに御山を穢す木のはかな

の句にあらはれてゐる佛蹟めぐりが目的であつたと見える。希水編の『俳諧畫像集』を見ると圓頂緋衣の温顔で、その上に

我とわが影置のみぞ月を友

不染

といふ題句がある。『俳諧年表』に下谷吉祥院とあるので前回に下谷と誤つたが、百古の『流行百家發句集』及び此畫像集に淺草新寺町とあるので、吉祥院の所在は淺草にちがひない。明治元年

五月四日歿した。

不染の句は概して平明である。時好に投ずる嫌味がないので古調の遺韻をつたへてゐる。名所を詠じたものに技倆の凡ならざるを見る。

花雪吹うしるに負ぬ下向道

踏かける芝の亡るやはしり鮎

鳩なりと聞て見かへる浮巢かな

墓原の淋しさぬけて盆の月

手のひらに鐘たゝきみる春日哉

葎戸や訪はれてはづす藪の隅

日の透や椿見上る爪上り

露と見し夜や白萩のはしり咲

これを以て一律に評する訣にいかないが、清新な客觀的境地を持つてゐた事を察するにかたくないであらう。

私は少年のころ帳場格子に向つてむさぼり讀んだ本を忘れない。父々の事もその頃幹雄の『俳諧名譽談』で知つたので、たま／＼その句に接したゞけで頗るなつかしまれる。小島氏、利太夫、墨羊齋は庵號である。上野日光の人で甚太夫の初名で日光勘定役を勤めたと名譽談にあるが、下毛父々としてその句を載せたものがあるから早く句作に志したのだらう。江戸へ出て小菅親土藏奉行から進んで御金藏奉行に出世した。西馬の序ある弘化四年板の『すがみの』に、父々は

鳥の巢もふえて戸ざゝぬ世也けり

の句を寄せ、奥附に編者鷺眠を惺庵寓居と記してあるので西馬の一門であらう。連句は百韻四五十卷づゝ、發句は一季一千句づゝ詠じたさうで明治元年六月、享年七十三で故人となつた。幹雄は「治世に武事を失はず」と評して、次の句

二つ來て死を争ふや火取虫

に父々の氣概を感じしてゐる。前の鳥の巢といひ此句といひ、紛々たる月並臭を脱しないが、

田作の帛紗に付てこぼれけり

國栖笛に散をさまりぬ星明り

釋奠髭にたきものしたりけり

穴を出て我影を追ふ地虫哉

石楠花の上風寒し松蘿

これらの句を見ると眞率で巧む處なく、武士的性格の風流人である俳がよくあらはれてゐる。

俳道に寄與した氷壺の著

雙雀庵氷壺は岡田氏、常陸土浦から江戸へ出て師禾葉の雙雀庵を嗣ぎその二世となつた。氷壺の永く居住した兩國若松町は『禾葉七部集』の天の卷に東都若松軒藏とあるから師の舊庵であるかも知れない。氷壺の名は天保九年の『續蘂盒子』から見えるが、大梅の跋に「禾葉の門人有隣、蘂屋、蘂雅、氷壺らおのが師を信するの篤、これまでの集どもを輯るに七部に一部をあましぬ」と氷壺を『禾葉七部集』の編者にかぞへてゐるので、禾葉門下として重視された事が知れる。氷壺を有名にしたのは下總の文哉との論争である。事の起りは文哉がその友一松の賀庭に興行した歌仙の捌きを氷壺が難じた爲めで、文哉は怒つて『俳諧問答』を刊行して反駁した。氷壺は門人漁

藻を表面に立て、「俳諧龍雀」を以て再評したが、指合去嫌の論に過ぎない。兩者を批判した『俳諧破魔弓』に「其難陳とも憎むべくも笑ふべし」とある如く、嘉永二年から五年に渉る水掛論で兩成敗に了つたが、俳壇的には氷壺を優越者と認めさせる事となつた。

氷壺が俳道に寄興した『俳林良材』は安永五年板の小菊本四冊である。例言に「歳旦より歳暮に至る迄一題ももらす事なく擧げ、題に寄ては細註を入れ、古人今人の句を顯はして一瞬に見やすからしむ」と述べてある通り、作例を多く擧げた季寄大全であるが、歳事記が俳諧に没交渉な年中行事の解説を主としてゐるのに對し、俳句の作例あるものを限つて収録してあるので實際的效果は遙かに大きい。氷壺は『今人明題集』をはじめ『安政六百題』及び『文久發句六百題』を編輯してゐるが、『俳林良材』が最も力を傾注したもので、今日でも覆刻してよい價值を持つてゐる。

明治二年愛弟子佳節の死を哀みて十月八日歿した。雙雀庵は遺弟如白が三世を嗣號した。明治三年如白の板行した追善集を『青空集』といふ。

氷壺の句は量に乏しくないが、平板で調子が低く感慨性の一向ない句ばかりで、諸集から抄し

て見ても甚だ張合ひ抜けがせざるを得ない。

朽木めく老が身にさへ花の春
賑はふや大黒舞の格子さき
谷越して響きの來るや雪なだれ
口にあふ葩煎のかるみや酒の後
そよぐ葉にせつかれて咲くさうびかな
日くるみし顔斗出す紙帳かな
杖重し思ひ寄る日の入梅ぐもり
ひと葉ちる影のさしけり簾ごし
一本の芦に流れぬ氷かな
歩行丈間を置てもちむしる

業俳として俗調に媚びるのは卑しむ可きだけれど、氷壺はあながち人氣取に卑俗をこゝろざしたのでなく、文學的識見を有しなかつた結果である。

大蟲の探訪羽人の情誼

藻魚庵大蟲は池永氏、无弦の號がある。江戸の人、大梅の門系で俳行脚を志して四國より九州へ涉つて吟蹟を存してゐる。點業のいとまを以て芭蕉翁に關する文献を究めて『蕉翁年譜』を選び、翁の遺墨を採訪して『芭蕉翁眞蹟拾遺』を編し、いづれも出版に至らなかつたが、大蟲の序ある『葦まかき』に

蕉翁年譜撰述机上

うれしさや糊も氷らぬ冬ごもり

大 蟲

繼 足 す まゝ に 高 き 炭 の 香

桃 仙

兩吟歌仙の表を掲ぐるので右年譜の稿本がある筈で所在の知れないは惜しい。眞蹟拾遺は高安月郊氏が所持され殊に消息類を多くあつめてあるので書史的價值がある。同門卓朗の孤山堂を函館の無外に相續させ、釣月を補助して深川長慶寺に

蕉翁の發句塚のかたはらに

孤山堂主の墓碑をいとなめ

る遺弟にかはりて

ひとつ葉もしげれしぐれの塚隣

大 蟲

の句と共に卓朗の墓碑を營んだ事は『夏書はじめ』に出てゐる。明治三年十二月八日歿した。大蟲の句は多く見受けないが、不染の校合した『名所發句集』に收めるもので旅中の吟懐を知り得る。

讃岐象頭山

師走にも江戸人に逢ふお山かな

彦が根やみおろす花も雲のみね

筑前介の大門

夏山のしたゝりもるや洞のうち

筑後高良山

ほとゝぎす山の陵々鳴あぐる

早期俳人の個人的考察

鯖腐らせ石

山越や石は見ずともくさり鯖

など詠ずるところ甚だありふれて嫌らないが、さりとして俗調に随してもゐない。

隨巢羽人は吉岡氏、佐五兵衛と稱し、上總柴山の人、天隨貞翁の門より出で、白兔園の傍系ながら梅室の俳風に私淑してゐた。初號を涼風舎白羽と呼ぶ。家を江戸へ移して點業のみでは生活に困難なので、溝口流の筆道を指南し、淺草の三好町から本所松倉町に引越してこゝに永く居住したさうである。羽人は情誼に厚い人で下總の竹溪舎麥人の爲に安政五年孝子麥二を扶けて『まつゆ』を板に起させ、同じく下總の一門で飛鳥園天堂の爲に萬延元年連衆をすゝめて『寒念佛集』を刊行させてゐる。兩書共にみづから序又は跋を記して故人を追慕してゐる。著書には『藤實集』及び稿本『梅室文集』があつたが散佚した。明治四年五月十三日、享年八十八を以て歿した。本所太平町本佛寺に葬る。隨巢の號は東杵庵顧言の女婿三令が二世となり、筆道の方も此人に傳へられたが、三世は三祥といひ本所の瓦屋で、羽人より芭蕉翁の眞蹟その他を傳來して私も展觀した事があるが近年故人となつた。

羽人は趣向を求めず調子の軽い句を好んだので、今日から見ても不感服なものだが、あの時代の點取臭は脱してゐる。

事もなし事もなしの花の春
川狩や上まで來たる山の雲
船便り尋る川岸の殘暑哉
相宿や今朝の寒さを襖越し
配り出す膳にふり込あられ哉

こゝに抄したのは無難な方で羽人としては「春嬉し年かさねてもく」といつた處に得意の微笑をうかべてゐましたらう。

鷗外の細木香以に就て

紀文の千山は其角といふ風流のあひかたを持つてゐた。元祿の華かな背景に引立てられてゐる。今紀文の香以は黒船に怖えてその上倒幕の険しい雲で時代が暗く沈んでゐた。俳諧のたいこを永

苦茗を侘る香以の句境

香以は細木氏、通稱を藤次郎といひ、江戸山城河岸の津の國屋とよぶ升酒屋であつたので津藤で通つてゐた。俳名を僊寓と號する父は春水が『梅曆』に千葉の藤兵衛として描寫した人で、香以も部屋住の子之助と稱した時分から遊蕩した。俳諧には初號鯉角、又李蠖、梅の本、俵口子、破笛山人、梅堀、桃江園の諸號を持ち、遊行上人から許されて壽阿彌、後に梅阿彌と云つた。可布庵門から出て、永機の深川座に入り、洒落な江戸座を好んで家没落、下總の寒川に閑居後も俳諧を以てその鬱を散じつゝあつた。明治三年九月十日歿した。享年四十九。

香以の評判は慶應三年板の『くまなき影』の影繪に、

針 持 て 遊 女 老 け り 雨 の 月

香 以

山城河岸に住て俗稱攝津國屋藤次郎といふ。好みて老莊の學に耽り性活達にして常に花街戲場の窓に遊び、黄金を紙花と等しうちらし、白銀を三角の雪と降せり。故に世の人今紀文と稱へしも、止まる所を知て閑室に紅塵をさけ、更に往時を見かへらず、俳狂戲文の巧なるは

千山も及ぶ事ひきく長根も才の短きを恥べし。

と贊した一文で推察されよう。俳人として千山より光つて見えると前に述べたのは、千山は俳諧の今に傳はるもの甚だまれであるが、香以はその量に於て遙かにまさるからである。永機の「香以居士發句」から

花 浴 る 白 魚 は み な 女 かな

爰 波 め と 月 や 浮 ら む 春 の 水

仲の町にて

傘 桶 に 絞 る 櫻 の 雫 かな

市川小團次琴三味せんの師匠山春糸女

實は光盛の妻唐糸

春 を し む 泣 せ 上 手 や わ さ び 酒

錢 なく す 智 恵 かり ら る 卯 月 かな

矢 走 の る 人 の 提 け り け し の 花

早期俳人の個人的考察

下總寒川よりの文通中に

盗ませる葱も作りて後の月
霧晴やみなこちら向く山の形
鱒切の鈍きも光るさむさ哉
朝明や鯨に見かへる菜大根

右の十句を抄して豪華な言葉のうちに淋しい気分をつゝんで、芳醇な美酒よりは一盃の苦茗を
侘びる風情を見らるゝが、自然を看却して人事趣味にながれ、あぶなく人情の世界に踏み入らう
としてゐる傾向は、江戸座の愛好者として一面には狂歌の作者であつた香以としては是非もない。
たと似而兆風流を銜ふと云ふ程の癖がないので、月並者流の駄洒落に落ちなかつたのが意を強う
するけれど、その他の句に没趣味的なものを見掛けるのは、當時の俳壇に於け通弊である。

京の公成と大坂の鼎左

芭蕉堂公成は河郵氏である。一事庵百古として京都東山の双林寺に寄寓したが、関更より蒼虬、

千厓、朝陽へ、つぎ／＼その統を傳へた寺中の芭蕉堂に入り、五世を嗣號するに及んで公成と稱
した。周防の人で一に錦波ともいふ。双林寺中に假居したのは嘉永三年であらう。瓢々齋の百家
句集序に「ことし道人東山の柴戸に一夏を送る」とあるが、その序が同年冬の執筆だからである。
嘉永四年江戸へ向つて旅立ち、松島、鹽竈を逍遙して再び江戸に入り、「しぐれ降ころ吾梅の本に
わらむづをとき冬籠して」と百家句集の爲山の序に見える。京及び江戸への旅行は右の句集を選
む爲であつて、翌五年草稿をとゝのへ、『海流行百家發句集』と題して江戸の須原屋茂兵衛を板元
に小菊本二冊を刊行した。それより京へ戻つて芭蕉堂の堂守となつたが、王事に盡して明治元年
六月六日暗殺された。享年六十一。

公成は蒼虬の傳統者で巧みに師風を摸して能事了れりとしたらしい。流行調とは炭俵の輕みを
覗つて、更に低きについて行つたそれを指したので、いはゆる月並調の濫觴である。だから公成
の句は

藪入の過てともさす行燈かな
巢一ぱいそだて上けり乙鳥の子

うすものや仕立もあへずきて見たき
ふかれ来てとゞまる雲やのちの月
隣から直をとほれけり炭一荷

誰しもが頷く人情味と上りの生活描寫に了つたが、それが一般に喜ばれた時代だから公成ひ
とりを咎められぬ。

花屋裏で遷化した芭蕉翁を慕つてそこへ庵を結んで住む。その奇特な行ひを感心する者が周圍
にあつまつて来る。奇淵の後、花屋庵へ直つた鼎左が永く大阪人の人望をつないで行つた理由で
ある。鼎左は藤井氏、花屋庵はその所在をさしたので俳諧點者としては桃の本と號した。大黒庵
は師奇淵から譲られた名である。大阪の業俳連盟帖と見られる嘉永六年板の『俳諧種瓢』は貞門、
檀林、蕉門の俳系を稱する三十七宗匠を集めてゐるが明治まで名聲を落さず生存したのは鼎左一
人である。鼎左の編した『浪華五百題』は安政二年板の二編を見たが、初編は知らない。二編の
序に「あまねく我机上に投じたるもろ人の吟草なり。例に四時の題をわかち、附録に名所地名を
擧、見ん人々のこゝろに應じて其秀詠に感歎し」とあるので、此乾坤二卷は初編の續きでな

い。奥附に『鼎左自撰句集』近刻とあるが出版になつたかどうか分らない。

元 祿 の ね は ん に 入 り ぬ 初 時 雨

これを辭世に享年六十九で故人となつた。鼎左は文通上の交際が全國に涉つたので、大抵の出
板ものにはその句があるし、『浪華五百題』にも二百四五十句發表してゐるので、自撰句集を見た
と同一である。

突 あ げ て し ば ら く 霞 む 手 鞠 哉
海 を 見 て 戻 れ ば 霞 む 戸 口 哉
若 草 や ち ら し た 帯 を 鹿 の お ふ
眼 の さ め て 卵 の 花 寒 し 駕 の 中
水 草 や わ す れ て を り し 花 の 咲
稻 づ ま の 折 れ こ む 竹 の は や し 哉
人 中 へ ま ぎ れ こ み け り 秋 の て ふ
池 一 つ 殘 し て 雪 の 廣 野 哉

早期俳人の個人的考察

自然のありのままを素朴に描いたものも見受けるが、それで押し通して行くには鼎左は市井の卑俗な氣分にひたり過ぎてゐた。

摩訶庵蒼山の行脚生活

行脚に出さへすれば囊中一錢の貯へなくとも生きて行けた。その行脚には連句が鬼門である。うっかりすると三十棒を喫せられる。行脚に出て連句の技倆を認めさせたのは摩訶庵蒼山であるといふ話をふるく聞いてゐる。蒼山は羽前赤湯の人で遠藤氏、通稱を慎七といふ。摩訶庵及び雲の屋の號がある。江戸の風外門に鳳朗の教を究めて、京の梅室に就きその指導に依附したと云ふ。行脚して播州の加古川で春湖と共に環溪禪師に參禪したのは安政二年で、名古屋を立つて四國、九州を跋涉して裏日本へ廻り、八ヶ月振で三河の完伍亭に草鞋を解き『雲鳥日記』を出板した。越後の契史は人に屈せず行脚の苦手とされたが、萬延元年蒼山に接して遂にその門に入り、

梅檀の花におどろく藪木哉
今宵まち得し入梅晴の月
蒼山
契史

此兩吟を行つて『古木集』を板行した。文久二年蒼山上洛して四條に蝸廬を結び摩訶庵と號したが、遠江見付の烏谷が翌三年「我亡き後は京の蒼山に隨へ」と遺言して歿したので、遺弟霞村、三奏の二人が蒼山を迎へに行き、蒼山亦その知己を感激して見附に定住する事となつた。

蒼山見付にあるの日、野生の鹿の聲を聞く望みを抱いて慶應元年の秋、天龍川を越えてみかたが原に至り、野中の二軒屋のひとつ十疊の一部屋を借りて「米五升、味噌少々、茶ひとひねり」を糧として待つこと十二日、「今夜は雲おほく鹿の鳴べきけしきならず」といへる夜中にふと目覺めて「篠吹く風のさや／＼とする方より、ひゆうと鳴出たる聲のあはれさ腦髓に徹りて、五たいしばらく震ひやまず」と感動して「五聲までぞ聞ける」とその著『引馬野日記』にあるのは、雲鼓の『鹿き』と好一對の風流談である。

明治元年五月十九日、濱松在石田の門人古心亭で俄に發病して歿した。享年五十。著書は『雲鳥日記』及び『曳馬野日記』の外に『越の雪』『新二百員』『何をたね』『いふしろく』等がある。蒼山の句は門弟契史の『蒼山發句集』が明治五年板に起されたので、新規に手抄する世話が省けて一讀その傾向を知るによい。

しら雪に向ひしを我初日かな
草つめば岩の下水音すなり

三月十一日加茂の行幸を拜して

とく散りし花の悔べき行幸哉

庵は東海道の只中にあり

静かさのわが日盛といひつべし

青葉して清水せく子や見て居る子

越路に在て

盆の月波の題目見にゆかん

出雲崎

有明や雪吹にしきる浪の沫

うくたびにこなたをみるや池の鴨

水の滴るばかり清澄なる心境である。意識的技巧を見ない。此時代の人としては確に個性を持

つてゐる。少くとも自己陶醉の作家でなかつたと評し得る。

東北の俳人江山と葱玉

松窓乙二の門系で明治まで生存した俳人は一日庵江三である。陸前大河原の人で村井氏、名は兵治、椎の本、又、福田の翁とも稱したが、若年家塾をひらき、寺子の師匠をつとめつゝ乙二門に入つたのである。二十五の時俳行脚を志してあまねく諸國をめぐり歩いて、大河原に庵を構へ弘化三年葦神山の麓にその信仰する芭蕉翁の「鶯の笠落したる椿哉」の句碑をたて、萬延元年その友一止と共に編で『むつのゆかり』を出板した。此書は芭蕉翁の從甥仙臺向山宗禪寺に住持した也寥禪師の遺物として、芭蕉翁所持の如意、頭陀、石印及び反故、猿蓑草稿の一部を摹寫してあるが傳來に疑ひがある。也寥に關しては白雄の『俗表紙』にも見え不審を起す事もないが、これを悉く蕉翁所持のものとするには甚だ詭へ向きに出來すぎてゐる。

江三は家督を繼いだ吉兵衛が倒産して、晩年隣家の倉二階に佗住居をして明治三年五月廿八日歿した。享年七十八である。

江三の句集は『仙臺叢書』に新刻されたが、それとは別に私抄して置いた。

春風にふいと飛び蟹の泡
踏よごす足袋もむつきのけしき哉
花鋏乗せて置けり薄羽織
はだか灯の遠影ひくや雨の萩
世にすめば夷講にも呼れけり

この四季の句を以ても卑俗な流行調に全く同化されないで、師乙二を恥しめない一面を持つてゐた事を推稱したい。

函館に俳諧の残燈を點した大非居葱玉は、江戸の人で中川氏、通稱を伊兵衛と呼び、幕府の御用で五稜郭の工事を請負ひ、遠く函館へ渡つたのである。俳諧は卓郎門人である。安政四年板の『庭日より』に

師父の甲州出たちのはなむけに

こゝろよう返しもふけや青あらし

葱玉

右の句を詠じてゐる。卓郎を荻窪まで見送つた無外とはその頃から同門の懇親であつたが、無外が孤山堂の二世となつた『夏書はじめ』の卓郎追善席上には顔を出してゐない。それもその筈で明治二年四月十二日、卓郎の年忌五日前に歿し、

今に聞ひと聲うれしほとゝぎす

卓郎居士

此協起しの巻中初裏三句目に「むつくりと畑に残る墳のあと、葱玉」の名を残すのみである。葱玉は氷壺の『俳林良材』にその句を寄せてゐるのが、やゝ一トまじめに見られる位で、手許に抄録した數が頗るすくない爲め残念ながら佳作を逸して、

寺島幽栖

元日のあしおとすなり垣の外
兄弟、月代すりてはつ裕
卯の花やひと日こらへし空の色
たひら地に來て汗ふきぬひとしぼり

御高恩の有がたければ

早期俳人の個人的考察

浴してねまるばかりの師走かな

こゝへ擧げたのは平凡な境を出でない。御高恩はむろん將軍家の事で「ねまる」といふ方言は今に北海道で行はれるので、それを以て意識的に地方色を出さうとしたとは云へないが、より多くの句を集めたならば批評に價ひするものが必ずあるであらう。

太陽曆の頒布と新月令

季題語彙としての歳時記

現代の俳句は新舊を通じて傳統的約束の一である季題に關して、その題の季節を定めるのも、説明を求めるにも、疑問を決するのも悉く『俳諧歳時記』に據つてゐる。その座右より歳時記を奪ひ去らんか、俳人として一日と雖生存して行けない。歳時記がかくまで俳人に所依されるのは明治廿五年、『葉艸』が活字に覆刻されてからである。現行歳時記は無定見の編者が名義を濫用したもので、『葉草』の刊行されるまでに『明治歳時記』及び『新葉草』の如きが、木版又は銅版で發行されたが全く一時的の需要に止つた。蓋し歳時記は民間の年中行事解説書として、貞享四年貝原好古が『日本歳事記』を編録したのが濫觴である。俳人向にこれを編輯したのは曲亭主人の『俳諧歳時記』で享和三年刊行されてゐる。年中行事を列記したのみでは季寄の重要部分を逸するので、俳諧四季の詞を註して合輯し、俳諧的に多方面の内容となつたが、題名は節用抄として

後に歳事記と改題したのである。『葉草』は藍亭青藍が嘉永三年増補したもので、内容的には贅註と思はれる個所もあるが、紙数は倍大して殊にいろは別の編輯法が検索に便なる爲一般的に流布し、活字本の提供されてから一層の信用を得て、新規に組み直して一昨年あたり新活字本が市場に出たやうに聞いてゐる。季寄本位の編纂法を採つたものは既記の『華實年浪草』を三餘齋龜文が天明三年、『月令博物筌』を鳥飼洞齋が文化三年出版して、歳時記と雁行的に或はそれを凌駕する信用と勢力を持つてゐたが、索引を缺ける上活字の翻刻本が存在しない爲め、現代の俳人に衆知されてゐない。四時堂其諺の著『滑稽襍談』は量的に最も大部であるが、正徳三年脱稿して後寫本として傳はり、國書刊行會より覆刻され聲價を高めて行きつゝある。歳時記の題名あるものゝ二三及び内容的に匹敵する季寄の代表書を以上に紹介したが、孰れも太陰曆に準して月令的に編次したものであるから、太陽曆の採用さるゝ現代には季節の配置に於て矛盾がある。現行歳時記は名義を襲つて内容は太陽曆本位に變改したのであるが、陰曆を陽曆に季節を適合する爲には、明治時代の早期俳人が緊急の必要から苦心着手したのであつて、此事は俳諧史上よりも等閑視するを許さないで次に略説しよう。

太陽曆と舊季節の錯誤

明治維新とその前後の時代の俳人は時局に無關心であつた。直接の生活問題として俳人には一定の封祿がある筈がないから封建政治が打倒されても新に生存權を奪はれた譯ではない。社會的秩序が公武いづれにでも回復さへすれば、遊民として依然安閑たる寄食生活がして行けるのだ。開化の風はどこを吹く。むかしながらの入花を徴して句を寄せ、秀逸を筆耕に托して開板すれば庵中の月並となる。それが營利的だ。文學の品位を傷ける非藝術的行爲だと云つて難ずる者がない。宗匠の好みを覘つて野卑な張ツ句を争ふ運座を行ふ。それを射幸的な催しだと見て干涉する其筋がない。遊民的娛樂は風流の名に於て俳壇的に流行してゐた。連句は高尚である。式目を覺えるのが面倒である。月並の冊子に載するものも發句なら、點取屋の運座で詠むものも發句に限られる。その發句の題が季節的に符號するか否かと、發句の死命を制する絶対條件であつた。そこへ明治五年十一月、太政官布告を以て太陽曆の採用及び頒布を見る事となつたので、太陰曆に準據して四季十二ヶ月に配せられた俳諧季節は根柢から覆されて適従するところを失つたのであ

る。因襲の久しき新年を春とする觀念は牢乎として抜けない。それが新曆によれば冬季に配當される。冬の題詠に御代の春は自家撞着も甚だしい。七夕は、盆は、秋を夏へ、季節的に美しく洗練された傳説も信仰も覆されて了つた。俳人の困惑は年中行事の扱ひ方に關して殊に絶望的なものがあつた。改曆前といへども早晚その日の來る事を豫想した識者の中に俳人も絶無でなかつた。大阪の松の本素屋が安政三年『四時行』と題する四季句集に寄せた序文を見るに、

西洋理學の著はせる地動の圖説を閑するに、別に幾箇の世界ありて、近きを月とよび遠きを星といふ。この地球も其ひとつにして、皆太陽をめぐり萬物を育つ、既に佳鏡をもて太陰を望むに、山岳海川鮮なれば人種鳥獸も推て知るべしとぞ。爰にこの俳諧も又かれにひとしく其乾坤悉皆年々句となれるをあつめ、普く海内にめぐらし風雅をやしなふ事友人相應軒が精力にして、西洋の研究にもおさく／＼劣るべからず。

と、あるので地動説を辨別した位だから、太陽曆の知識がなかつた筈がない。と云つて此『四時行』の季節的の排列は依然太陰曆に據つてゐるので、素屋の「西洋人の研究にもおさく／＼劣るべからず」との推譽は何を指すのか知れない。たゞ俳人の一部に太陽曆を理解する豫備知識のあつた事は、安政三年の此一序文を以ても立證される意味でこゝに引用したのである。

新曆適用の新赛季句集

新曆の頒布から一年あまりの試練で、新舊曆の季節的對照を實際化する俳壇的傾向が現はれた。明治七年二月四睡庵壺公の著『てぶりのひま』が、管見によれば新曆適用の第一句集として認めよ。壺公は長門萩の人で東京濱町に寓居した俳人である。その序に「公布いまだ四季に至らず」といひ又「小築庵主季よせ改正の念あれども春夏のさだかならざる故に稿をとゝのへず」とあるので、三大家の春湖が発企して新曆準據の季寄編輯に着手したのだが、一年十二月月として春夏秋冬の四季を舊曆の如く排列す可き「四季のさだめ」が知れないので未定稿であつた。壺公は福澤諭吉の明治五年版『改曆辨』に三、四、五の三ヶ月を春としてあり、福羽美靜の明治六年版『歌題歳時表』にもさうあるので、新曆舊曆より二ヶ月おくれと解されるが、「ことしの新曆を見るに」として一ヶ月おくれとする見解を以て、初春を二月に置いてそれから順次一ヶ月おくれに配合してゐる。その理由は左の如くである。曰く

の矛盾を來さず調和する扱ひ方をしてゐる。

年々歳々風月の心頭にあるのみ

月丸き日はいつくぞはつ曆

壺公

柳さくらもまだ若きとし

爲山

乗つるゝ駒嘶ひたつ春風に

山公

呼びつる人の霞む軒下

山公

評判はとりく競ふ二の代り

山公

雨夜の伽にあぶるかき餅

山公

季題の順位から行くと初曆及び若き年は歳旦である。一格を持つものと解して冬季の題を此發句及び脇には詠み入れてない。第三は春季に推移つてゐる。新年の題を悉く冬季に決定するならば第三は當然無季の雜である筈だ。もし第三を同じく冬季で扱ふならば季戻りになる。壺公の第三春季説が一卷として進展する上にも都合がよい。四句目は霞、五句目は芝居の二の代りで春季三句はこれで了つた。かき餅は現行歳事記は冬季と解してゐるが、寒餅をなまこに搗いてそれを切

つて貯へて置く意味からであるけれど、かき餅は冴返る日などに焙つて茶うけにするのが本位だから、むしろ春の季節的な感じを持つてゐる。だが、かき餅をこゝでは雜として扱つてゐる。

かうして壺公の『てぶりのひま』は式目の煩はしい連句にも、新曆に準じて季節の適用上無理と破綻を生じない用意を見せたので、俳人は新舊曆を四季に對照して、新曆に適從するやゝ確乎とした觀念を得たのである。併し、『てぶりのひま』は新曆による季節を月令順に作例を擧げた句集である。季寄として編輯したのでない。舊曆本位の歳時記を使用する者の困惑すべきをこれを以て一指針をあたへた程度のものに過ぎない。恒庵見左の著『新編題鑑』が出で、對梅宇乙彦の『俳諧手洋燈』が現はれるに及んで、新曆本位の季寄が一定されたのである。見左の『新編題鑑』は乙彦が「陽曆頒行ニ及ビテハ一年十有二月、季節違ヒヲ生ジシヨリ、俳諧ヒトリ因循シテ春ナラヌ一月ノ題詠ニ、舊正月ノ意ヲ以テ作ラバ大ニ姿情ヲ失フベシ。是以テ嚮ニ見左ガ新編題鑑ノ擧アリ」とその編輯方針を『手洋燈』の附言に評してゐるので内容を推知されるが、乙彦は「然レモ未ダ密ナラズ」と難じ、新曆の適用に關して順の峯、逆の峯の月次を「新編題鑑ニハ順ヲ今ノ三月トシ逆ヲ今ノ八月トス」と新舊曆の誤用を指摘してゐる。『手洋燈』に就ては後に解説する。

俳諧教導職と教化運動

門附から寄席藝人となつた浪花節及び講談を以て、無産階級の大眾を勸善的に指導して行く文部省の教化策はいつの間にか立消えて了つた。文部省は教化の掛け聲をかけただけで、浪花節語り及び講談師を思想善導員に任命するの意志がなかつた。然るに明治新政府は俳諧は風教的文藝である。世道人心を感化して行く偉大な力を持つ。俳諧に師たる者は須らく教導職として遇すべきだ。それには人格學識を考査した上で稱號を授與したがよいと云ふ政策から、喧傳的な掛け聲のみでなく俳人を實際教導職に補した事があつた。明治七年神道大教院でその考査が行はれたのである。課題として傳へられるのは三條の辨解、十七兼題、十一問題で、三日間に涉つて口述及び筆記試験を續行した結果、三森幹雄、鈴木月彦の兩人が合格した。俳諧年表に幹雄一人が補せられた如くあるが最初の合格者は月彦と二人で、稱號は推薦的に爲山、春湖の大家にも授與されたのであつた。月彦に師事した故松本蔦齋翁は語る。「いざ試験と聞いて教養のない宗匠はみんな狼狽したさうです。さうでせうとも不合格になれば金看板の箔がへぎ落されて了ふのですからね。

春湖や爲山は遊歴に名を藉りて地方へ行脚に出掛けたと云ひます。庵中に引込んで居留守を使つた宗匠もあつたさうですよ。月彦と幹雄とが登用されて、教導職試験係をも命じられたのですが、これまでの顔に免じてそれは勘辨してもらへまいかといふので、表向は試験をした事として爲山や春湖も教導職になつた譯でした」と。さうした裏面の事情は必らずあつたに違ひない。公開的の席上では月彦、幹雄の次にその座を指定されて爲山、春湖の大家も不承くながら逆はなかつたのは、此教導職の一件があつたからであると聞く。

政府の方針に迎合するといふよりか、教導職に補せられた手前もあつて、それらの俳人が發企となつて俳諧を中心とする教化運動が起つた。その時設立されたのが俳諧教林盟社及び明倫講社である。教林盟社は爲山が人望的に社長に推されて前記『てぶりのひま』の如き序文にすら、教林盟社老長七十一叟爲山といふ肩書を使用してゐる。春湖が二代社長となつた。明治十九年爲山門の素水が常に經濟的に援助した功勞もあつて社長に推薦せられた。現に存續して長岡笑波氏が社長である。明倫講社は幹雄が社長に推擧された。明治十三年『明倫雜誌』が發刊してから大に發展した。今の『ホト、ギス』よりは社會的に勢力を持つてゐた。神道の結社で後に古池教會

を起し、信仰的に一致したからである。教林盟社は素水の『ふゆこもり』に「明治七年四月教林盟社ヲ起スニ及テ」と見え、明倫講社は『明倫雜誌』の第一編の發行説に「明治七年八月初て明倫講社を設立す」とあるから設立の前後は明瞭である。

開化人名録の體裁内容

『崑山』及び『玉海』の二大句集より卷末に作者名録を國別として附載するのが常例となつたけれど、文音を通すべき住所が記してない。寛文板の『俳諧作者名寄』は作者名を系譜的に記載したもので、これに小傳を附註したのが『綾錦』や『誹家大系圖』である。俳人の名號と住所を本位に編輯したものは青木鷺水の『人名録』が書史的に古いが、私は爲山の引用した書名を知るのみで實際に見てゐない。文化十年に出た長齋の『萬家人名録』及び文政四年の同書『拾遺』は畫像入で、大本全七卷の大部のものである。惟草の『俳諧人名録』は初篇、二篇と刊行され畫像の代りに筆蹟を挿入してある。本稿に既出の謝徳の『畫像人名録』は範を『萬家人名録』に取つたのであるが、無名の門人を紹介する意味で出版したのだとも見られる。明治時代の俳人と住所を掲載

308872

した最初の版本は『俳諧開化人名録初編』であらう。小菊型の横綴りで用紙は薄葉の木板刷である。爲山の序がその要旨を語つてゐるので引く。

今はむかし貞享元祿の比全盛なる俳家尠からず、その師をはじめ派下門下に至るまでくはしく顯はす、人名録撰者鷺水なり。又近くは文化年中人物を畫書入たる長齋の編集あり。その後此たぐひの冊子綴出せる誰かれは、時に望みて水莖の根もなき仕業にや、星移り霜消て名聞のみ目にふれず。方今維新の時を得て、縣々區號市在村より四時の吟迄洩さず、梓にとて開化人名録初編成ル。是が序詞を精知、菊雄のいふに否みかたく、秃筆とりてかくのごとくほゝ笑みくゝてもらす。

七十三老衲爲山

東京
俳場

明治九年文月

右爲山の校合で、閑樹園菊雄、語石庵精知の共輯である。出版は序文の明治九年十二月であつた。縣の下に國を記しその國名の五十音順に排列してある。罫を引いて住所を二行に記し、姓氏を擧げ、號を註し、四季一句づゝの俳句を掲出せる體裁は、現行の『俳家人名辭書』の類と同一

太陽曆の頒布と新月令

である。東京俳人の一例を挙げる。

東京府下第二大區二小區
櫻田本郷町十一番地

星野康齋
號爲誰庵

柴に海苔よらず成けり歸る雁
あすありとおもふ宵寝や夏の月
水も色を見する日比や紅葉鮎
松原のあかつき闇や啼千鳥

花外更 康 齋

康齋は由誓の門人でその爲誰庵をつぎ、『由誓文集』や『爲誰集』を追善に出版して居り、岡野知十は此の人に明治以前の俳壇事情を聞いてゐた。知十の著にその花外の前號で談話を引用せるものと見受ける。太白堂吳仙、桂花園桂花、無事庵鶯笠、すみれ庵愛海、東杵庵月彦、雪中庵梅年の如き當時として新俳人が登録されてゐる。開化といふ名を俳書に附けたものはこれ以前に見付けない。

芭蕉翁二百回取越句碑

芭蕉翁を崇拜して宗教的信仰とまで化した俳人は、翁の二百回忌は明治二十六年に相當するがその前に取越追薦を舉行して置きたい願望を持つてゐた。明治九年の十月、正當二百回忌より八年前に關山大喬の發企で築地本願寺中の法重寺で營まれた。大喬は關山氏、通稱は源三郎といふ日本橋室町一丁目の富豪であつた。爲山系統の俳人で俳人筆蹟の蒐集趣味があり、芭蕉翁の大津繪の匂入り手簡を愛藏してゐたが、明治三年二月築地本願寺で聖德太子一千二百五十回御遠忌を修するに當つて、芭蕉翁の句碑を庭前に建立して結縁の記念としたのであつた。それより七年後に本堂造營の障碍となる爲、此碑を法重寺に移したのである。碑の前には

俳諧は萬事作り過たるは道に叶はず其形のまま又は我心の儘を作りたるを能キと存い
かく御含有て可然ゆ取極たる事も無之ゆ是等いかゞニゆ哉

大津繪の筆の はじめは何佛 はせを

と刻して手簡にはその前に「是等類字之切格の有りゆ兎角」と見え、句の後に「右者疑てかゝる

意なり書外又ちかき内可參い早々以上 十三日 はせを」とある前後を省略したのである。追薦句麈には爲山、等哉、春湖の三大家、永機、桂花、謝徳も招待されたと見えて、協起の歌仙にその作を列してゐる。大喬は句碑の模寫と大津繪の佛像古筆を掲げ、建立の由來を記し、芭蕉翁手簡の眞跡を石刷にて模刻し、歌仙一順、並に諸國俳人の發句を輯め、『翁追善の筆跡集』を同年板に起して配本したのであつた。

教化的効果と嗣號問題

招魂祭に於ける俳諧席

およそ遊藝の道で何師と味ばれる者は諸職人と同じく舊幕の頃から卑しめられたが、俳諧師は最も下劣視せられて來た。黄表帟や洒落本に描寫されたかれらの生活を見るがいゝ。なさけない哉まつたくの幫間である。さまがない。その俳諧師が明治新政府から教導職に補せられたのだ。教林盟社だの明倫講社だの、教化的な結社となつたのだ。階級的に見て驚異すべき現象である。その反響が何等かの形式で起らない筈がない。果然明治九年十月西京で執行された靈山招魂祭に於て、猷詠のため、和歌席に對峙して俳諧席を設ける新位置を俳人として獲得したのであつた。殉難志士の祭典に遊民階級の俳人が參與するその事が、俳諧を教化的に認識させる運動の具體的な現はれであつた。此祭典は元治元年蛤門に迫つて敗れた長州藩の戦死者を主として、十月十四、十五の兩日東山の祭祀場で神式を以て行つたのだが、奉納の催し物の方がむしろ大掛りであつた。

北は華頂山方丈に古美術を陳列し、智恩院内良正院に西本願寺の茶席を開き、加茂社人の競馬があり、西に酒饌所が二ヶ所、安居前平乃屋には能狂言が掛つた。華頂山より東へ、泰平寺の清樂合奏、正阿彌の諸士遺物及び藤の棚の書畫展覧があり、東大谷に東本願寺の茶席が設けられた。茶席は更にその間／＼に太閤の北野茶の湯の大衆的な賑ひを以て配置されてゐた。七條川原から花火を打揚げて景趣を添ふる。その雜鬧その人出の思ひやらるゝ中に優雅な和歌席が建仁寺内の正傳院にしつらへてある。その和歌席と對抗する意氣込みで、双林寺の芭蕉堂に俳諧席を設備したのである。俳諧席の宗匠は傳統上から芭蕉堂六世壺公のつとむる處であつた。壺公は永安氏、太陽曆による季題の新月令を主唱した『てぶりのひま』の著者四睡庵と同一人で、煩惱老人、又、風月山人と號してゐたが、長州藩の人だから此祭典に關して個人的交渉もあつて、俳諧席を招魂祭の行事として和歌席と對立させる便宜に浴したのであるかも知れない。右は壺公の編輯『玉の光』に掲ぐる「丙子十月靈山薦事諸遊方位」と題した見取圖と本文とを參酌して記したのだが、俳壇的の應援を得なかつたので壺公はこれを跋文に憤慨してゐる。

沒世間的な俳人を憤る

招魂祭の兩日双林寺芭蕉堂の俳諧席で百韻二卷を興行した。十四日は老俳古樵の發句で脇起しを催したので『玉の光』には表八句を擧げ下略となつてゐる。

ことしは招魂の大祭ありときゝて

千代の秋かけしいさをや松の聲

古樵居士

くだけて光るやま水の月

壺公

その附註に「居士は此八月七日といふ日没し玉ふ壽齡八十二誠にめでたき往生也」と見える。十五日には本格的の百韻を連衆及び諸國から招魂祭の爲め上洛した俳人が各一句づゝ一順で完備した全卷を發表してゐる。

十月十五日興行

百員

昔おもふ秋にめでたき祭哉

壺公

教化的效果と嗣號問題

いろく草の花も咲く頃
 月の影うつる流のよくみえて
 あの男敷と聲かけてたつ
 積あげし荷敷しらべる惣懸り
 どふも油断のならぬ空合
 冬椿もらひによりてひと手前
 さむげもしらずそだち柄とて

五 梅
 漁 藻
 稻 處
 青 柿
 鶴 影
 百 所
 仙 草

表八句を抄出して見たが、平凡な趣向と浅い言ひ廻し、無變化の見渡して甚だ體屈な卷面である。四句目の稻處は岸田氏、樗庵二世で梅室の系統ながら大阪の俳壇では多少聞えた俳人である。裏移りとなつて諸國俳人の附句が見えるが、名残の表月の座に「すむ月に二階ざしきは西おもてアハズ蟻洞」とある蟻洞が、近江義仲寺の住持で無名庵の十二世であつた。その他は「諸國の來客當日出席の部」として近畿北陸の俳人の發句を録してあるが、献詠發句の作者を加へて百人を越えない。壺公は「此集や京坂その他の諸彦の名録にもれたる者甚だ多し」と辯解し、又「當日の

雜沓一句付れば後客に譲りて出詠までに及ばざる者なり」とその理由を述べてゐるが、蟻洞を除いて著名の作者が居ないので、招魂祭の行事として俳諧席を設けた世間への手前、壺公の心中おだやかならず「都下に在りて自ら俳家と名のるの徒の其派をたてゝ擧て出句せざる者ありとぞ」と俳壇的不一致を難じ、更に「斯く開明の地に住ながら一句の以て殉難の士を弔ふ無く、反て弊習を固守するは頑愚の甚しきにあらずや」と悲憤してゐるので見ると、俳諧を風教的に向上させようとする一方、没世間的に花鳥風月を詠するを以て風流生活としてゐた俳壇的傾向が推知されて、俳諧教化運動の持久性に乏しい點に氣が付くのである。

金原明善の風教的意圖

だが、その反響は個人的に意外な人物を俳諧に引入れて、教化的な一面の効果を擧げたのであつた。静岡縣の大農金原明善の社會的善行は殊にその勤儉談で有名になつたが、あの善行を培つた俳諧を明善の一代記から逸してならない。明善は明治初年から天龍川の治水策に奔走した。常にその相談を全國を行脚して治水に關する見聞の廣い俳諧師摩訶庵蒼山にしてゐた。蒼山は既

に掲げた如く晩年遠州見附在にその摩訶庵をうつして明善の日夕往來するに便であつた。蒼山は契史の編『天龍しふ』に「往ぬる己巳の年正月十九日黄泉に赴き」とあるやうに、明治二年故人となつて右『天龍しふ』が同四年追善に梓行されたのだが、明善はその三周忌には表面的の關係がなかつたやうである。明治十年の秋に至つて蒼山思慕の情を高めて、世間的に盛大な追悼法要を發企したのは、俳諧を風教的に善用して行く動機から出たのであらうと思ふ。法要の爲め蒼山の莫逆として俳諧教林盟社の小築庵春湖を東京から招聘した一事から見ても察するに難くない。明善の編せる『しら露集』の春沙の序にも「金原氏は累世の家産と一身の心思を竭して善根を天龍の川堤に敷けり。宜なるかな居士と氏と道を同うせざるも其交りのあさからざりしこと」と俳道に於ける師弟の交渉のなかつた事を述べてゐる。天龍川治水に就いて兩者の關係は次に引く春湖の詞書で明確である。

・金原明善賢契摩訶庵居士と深き睦み有て、天龍川治水堤防の事に臨みて補翼の力を盡されしかば、此信意を忘れず、今茲居士の追福の勝事をさへ取興して、普傳精舍に正式の文臺を設け、居士が門葉の外にも廣くまねきて此事あり。賢契が高誼を感じ薙の盛んなるを悦ぶ

靈 祭 る む し ろ や 暮 て 月 も 訪 ふ

春 湖

明善は治水の協力者として蒼山の舊功を彰すると共に、俳諧の教化を體驗的に鼓吹する意圖を有した事は、明善自身が俳諧を試みてゐるので知り得る。それ故法要の席上、

協起追善之俳諧

白 露 は こゝ を は れ な り ひ と 嵐

蒼山居士

千 草 に 影 を の こ す 有 明

明 善

と脇句を吟じ、此一順には蝸堂、木潤、蓬宇の駿遠參の三ヶ國に知らるゝ俳人が見え、明善の悼吟として

稻 か れ よ 焚 て 佛 に そ 一 な へ た き

明 善

といふ發句を別録してゐる。蒼山追善の此『しら露集』は奥附に「明治十一年六月金原氏藏」とあつて、明善の編輯で翌十一年梓行された事實が分る。明善に關する美談は郷土史の教科材料となつてゐるが、俳諧を以て人心を指導した事はあまり知られてゐない。

風 炉 遠州好風鐸 釜 蓮華形道也作
 炭 取 唐もの籠 香 合 時代蒔繪秋草
 石州所持 浪花千種屋所藏
 羽 箒 野雁 灰 器 柳川

此附註に「會席終てもとの堂に入」とあるから再び寄付へ戻つたのであらう。こゝらが流儀にもよるが普通の茶會と違つてゐる。初裏に移つて二句目から佳峰園等裁が出詠してゐる。

素^ウ布子に肌寒さうな船のもの
 高 觀 音 に 參 る 緣 日
 おもへばやおもひこぼるゝ曇り空
 結び手紙を添る岡もち
 言すにはおけぬ小言の番きせる
 山茶花散て廣庭の塵
 冴わたる朝三日月のほつかりと

機 裁 公 山 雄 湖 裁

月の定座で後入となつて、これから御茶頂戴となるのだ。

床 古銅手付 花入 花白蓮
 茶入 膳所遠州書付 桐ニ聖の一字
 銘すてはて
 水さし はちつるへ
 茶碗 古染付 山水中佛像
 茶抄 釣玄とも筒 銘さかひ
 ふた置 しからき 宗蓮作
 翻 さはり

正式の茶がすんで開の閑となり、ゆつくり寛いだ俳席を開く。

床 晋子傳來一軸 香盆 推黒
 俳諧五ヶ條 炉 御本 耳付蓮
 香盆及び香炉は花の座の前に献香する爲の用意である。

いせでも鐘は寺でつく也
 旅すれば店屋ものくふ氣の安さ
 よる歳くやむ癖は損くせ

機 山 公

りんと着て能装束の花のぬし
 風光もつ池のさゝ波
 かよふ蜂巢を守る蜂も世のたつき
 うしろ手突て椽に駕まつ
 逢ふていふつもりを胸に下稽古
 嬉野の温泉のうつり香もぬけ
 とろかけてあとも帆をまくそよあらし
 氷の箱に夏が來にけり

湖 雄 裁 機 山 公 雄 湖

歌仙に十二句の不足であるが「夕涼みの艤に廿四句にて下略」とある通り、角田川に晩涼の舟を泛べる爲め切上げたのであらう。此の茶の湯俳諧は早く蕉門に先例はあるが、永機の工夫で新規に案出された點もあるし、此時代の連句として洗練された内容なので全巻を録しておく。「欠摺鉢」の板行は明治四十一年で其角堂の藏梓となつてゐる。

新判者七名の大舉立机

その頃の永機はもう傾斜的の人氣を覘はずともよい。俳壇的に聲望を高めてどの方面にも流行してゐた。茶會に事寄せて爲山、春湖、等裁の三大家を招く如才なさが、先輩の嫉視を却つて好意に變化させる効果があつた。對抗的位置にある雪門一派を懐柔して行く親和性を持つてゐた。梅年は永機に推服してゐたかに見える、傲岸な幹雄も永機には論争を挑まなかつた。かうして永機は一人の敵もつぐらす門戸を張り、予雲に善哉庵を、三癡に雷柱子を嗣號させて兩翼とした上、明治十七年七月門下の新人七名を一時に立机させた。文臺開きのその集を『いはでこそ』と名付けて同年梓行したが、予雲の序文に「こゝに社盟の騷士七名七多羅樹の正眼に倣へよとて、おしまつきを立る事を許さる」といふ七多羅樹は「萩の露」の

空や秋蚊屋をあぐれば七多羅樹
 其 角

から採つたので、騷士七名は正義、孝節、機月、素直、歩月、機一、菟好である。

よりはの橋のたよりもて硯洗ふ

庵に七人の立机を許す

うつせ影な、この池は浅くとも

永機

この教誡に對して新宗匠七名の發句は左の如くである。

七草の六草に添うて我亦紅
 峯入や覺束なくも杖の跡
 明るみへさそひ出されて踊かな
 くらき夜を星の助けて秋の風
 しら雲に入かとばかり秋の蝶
 初月や踏込先は草の闇
 秋立やいつまで鈍き川の音

正義 孝機 素機 歩機 菟好
 正 義 孝 機 素 機 步 機 菟 好
 義 節 月 直 月 一 好

正義は市原氏、有竹居の號で知られた秀才で、永機は「片枝の松折れしより月も見ず」とその死を慟哭した程であつた。孝節は後に善哉庵となり、菟好は無漏庵となつた。機一は立机に際して免判狀に「君子ノ言語ハ相機ナリ、別號今茲ニ齋ノ字ヲ轉ジテ附授ス」と記し、一世湖十の別

號巽離齋の一字を轉じて巽離庵の號を與へられた。その後明治二十年其角堂八世を相續した後の老鼠堂機一老である。立机を許された者は孰れも考試を受けたので、百韻十卷を三日間で満尾すればいゝ。初日三卷、中日四卷、末日三卷の割であつたといふ。免判狀に添へて晋子相傳の「扶桑木」上下二冊を授與されたが、俳諧の作法、捌き方、俳席の事などを認めたもので、てんぐに筆寫したものと聞く。永機の一門は深川座の舊稱をすて、晋門又は晋派と稱したが、その社内では白雨社と呼び、藤堂詢堯齋の如き舊大名がすべての扶持をしてゐたので、茶の湯俳諧の諸道具のやうな名器を所持して行けたのである。

梅年の雪門と入像供養

永機に對抗する筈の梅年がむしろ永機に「推服してゐたかに見える」と書いた所以は、永機は舊幕のお茶坊主から俳諧師となつたので、先代鼠肝の深川座を背景に持つてゐた。その其角堂は文久三年『不忍千句』を興行して以來である。梅年は一日獨吟三千句を吐いて雪門の判者となつたといふものゝ、その雪中庵は明治七年四月同門の推舉で嗣號したので日が浅い。それに身分は

足袋職人である。永機はそれを承知の上で對等に交際してゐた。梅年はその好意に感激してゐたからであつた。明治十二年永機が嵐雪の木像を梅年に譲つて雪中庵に祀らせたのも兩者心契の一例である。此像は毛利家の稻窓露朝子が其嵐雨子の遠忌に大佛師をして彫刻させた二體の一で、其角の像は永機が先代から傳來して其角堂に安置してあつた。嵐雪の像は行方知れずであつたを永機が偶然手に入れたので、梅年の著『入像供養』に事の次第が記してある。その時、

嵐雪翁の肖像をこたび雪中庵へ贈りしよしは時雨窓の序に委ければ別にいはす

永機

兩の手に實を分る日や桃櫻

榎年

右歌仙一順を行つたが、『三吟未來記』の發句と脇句に擬したので、別に『みなし栗』の兩吟にならひ、

雪おろし蓼摺こぎの鬪うちも道を戀るが故なりけらし。今天和以來のちぎりをおもへば、
蓼すりこぎの恨みもなく、雪おろしの心解あふより、しのびやかにかたらひてみなし栗の
拾ひ残をさぐり爰に後朝の俳を次。八世雪中

と前提して永機と對座で試みた一卷と共に、梅年の永機に對する感謝の溢れであつた。梅年の文中に見える『雪おろし』は蓼太、『蓼摺こぎ』は雁宕の著で雪門對江戸座の論争書である。その宿怨をさらりと忘れて兩門の提携を見たのは永機と梅年との個人的友誼の結果だといつていゝ。梅年は此嵐雪像を贈られた返禮であらう。『空陰集』を見ると、

嵐雪翁のたしなみおかれし其角居士の位牌を永機叟におくりて

算ふるもあまりある日や庵の焔

といふ詞書附の發句がある。梅年の服部氏はその頃舊姓原田を改めたので、『入像供養』の門人尙丸の跋に「我祖の俳祖今猶連綿と八世に及ぶと雖、嵐雪翁の姓は唱ふる者だにもなし。さるを吾師梅年叟こたび服部の姓を興されたり。日ならず晋永機叟より嵐翁の肖像を譲らるゝも、師の姓をいつくしみ申さるゝ故にや」と記してある。梅年の門下は『入像供養』の由來を書いた時雨窓素粒及び松壽軒尙丸の外には、現雪中庵龍雨氏の岳父龍吟が雷堂の號で執筆を勤めてゐた位で、梅年の後を襲つた雀志はまだその門に立たず、一門の勢力に於ても永機門に比して遜色あるを免れなかつた。

春秋庵嗣號問題の裏面

俳諧明倫講社の幹雄は教化的勢力を以て俳壇を風靡する事易くたりとして、俳諧教導職に權少講義の肩書を加へ、その社中を神道的に信仰させて行く方針であつたが、傳統的背景が俳壇の空氣を支配する問題となるので、春秋庵號復活に就いて策動する處があつた。幹雄は『春秋稿』十編の序に「予今白雄師五世の俳脈を受て曩に明倫講社を開設し、連徒二千有五百名を統ぶ」と稱する加く、その師西馬から逆に逸淵、碩布、白雄といふ系統になるので、五世の俳脈には相違ないが、春秋庵號は碩布のみで逸淵は可布庵、西馬は惺庵の號であつて春秋庵の相續權を持つてゐたのでない。春秋庵の嗣號者に關してみき雄が、隨巢三祥編『もとの色』の序文に考證する處によると、

春秋庵白雄翁は關東正風中興の祖にして高弟數多ありといへども、第二世を相續すべき者は長翠、道彦兩人の外目ざす者なきによつて、長翠小簣庵を起して以て道彦に譲る。道彦も亦金令舎をおこして春秋庵第二世は葛三と定む。三世碩布に至りて道彦派と二派に分れ

四世春秋庵の主定めがたきを、京の梅室門人梅笠四世春焠庵の望みありて、大梅居孤山、可布庵逸淵の兩人梅室翁の承諾を得て四世春秋庵の主定りしかば、江戸中名主連一統、梅笠派となりて一時隆盛なりしも、

といふ風に、春秋庵は正確には三世碩布に至つて斷絶したと見るべきだが、梅笠の四世繼承に就いては同系統の者より異存も起らず、『春秋稿』の十編にも「花の雲の文臺は先考年頃秘藏しけるを去し某の年梅笠懇望に愛、春秋庵に寄附し畢ぬ」と誠廬が記してゐる程なので認知してよろしい。然るに落語家の弘湖が梅笠側に一言の相談なく春秋庵を稱號したので一ト問題起つた。幹雄はその解決の有耶無耶に了つたのを見て、前記『春秋稿』の序の續きに「此際に方りて春秋の佳號微々たるを如何せむと社徒にはかりて門派の老長有柳叟に委ぬ」とある如く、新規に有柳を起して春秋庵を名告らせたのである。有柳は野口氏、武州入間郡川角村の農家で俳壇的野心のない老人だつたから迷惑に思つたらしく、幹雄の詞書にも、

武藏野の有柳老人、社中の人々に春秋庵嗣號をすゝめられけるに、古稀の今更などいなみけれど

逃水や逃てもうつる月と花

みき雄

と云へるので推察される。有柳の春秋庵嗣號は明治十一年でその披露として翌十二年『春秋稿』十編が出板された。幹雄の眞意が那邊にあつたか知らないが、當時は香楠居と號して日本橋蠣殻町に明倫講社を設置してゐた。其社中二千五百名はちと掛値もあらうが、明治十三年『明倫雜誌』を月刊して俳壇的に雄飛する地盤が既に定つた事は疑ひない。

行脚の境涯と其漂泊性

宗匠の添状を持つて行先くを寄食して行ける雲水——行脚の境涯にその身を置くことは明治時代となつても俳諧修業の一とされてゐた。だから一流の宗匠になると行脚の二人や三人やは常に扶持してゐた。京都の伴水園芹舎はよく雲水を世話したので大に徳とされたが、明治十一年芹舎の取持で行脚の一人連梅が『假寝草』を板行した。その序に

いでや身は行雲の脚にまかせ、流るゝ水のながくしき旅路を花にうかれ月に嘯き、去年の彌生は巖島にありて春を惜み、ことしの秋は浪花江に立歸りて、あしの假寝をなす。か

ゝればしたしき友垣にもいとうとくしく過ぬる事の本意ならねば、心ばかりの一綴をものして其怠りを佗侍るになん。

とあるやうに中國を旅して大阪へ戻つてゐたのだが、明治十五年板の旭齋編『明治五百題』の人名録には

連梅

西京東山双林寺前朝よき庵

伴水園社中

と見え、永く芹舎の庇護を受けてゐたのだ。が、一年を通じてじつと一ヶ所に定住するのは雲水の身には苦痛である。雲水となる者は性格的に漂泊性を持つてゐた。連梅も同じく絶えず旅に出てゐた。『假寝草』で見ても「日はつれなしと聞え、佐渡に横たふと作り玉ひし昔のあとも見まほしと思ひ立る連梅法師を、たよりも聞ん寝覺の雁の聲 芹舎」連梅は此餞を喜んで早くも行脚の笠を傾けて旅に立つた。同じ雲水でも連梅の如く著書の一つも持つて居ればどこへ行つても優遇された。不自由な旅でなかつた。

明倫雜誌發行を中心に

行脚の添状とわらじ錢

俳諧行脚はだしぬけに手振らでたづねて行つても、たづねられた俳人は必ず逢つて挨拶をしななければならぬ。その行脚が然るべき宗匠の添状でも持つて来たならば快く一泊させて、これに若干のわらじ錢を捻り紙にして渡すといふ不文律が實踐された、先例として蕪村の左の添状がものを云ふ。

内書

二柳庵萬一貴家に一泊いたされゆはゞ、乍御太儀餞別いさゝか御心付被_レ成ゆ様に御頼申ゆ。都而行脚の人には多少にかぎらず餞別草鞋料を進ゆが、はいかいの式にてゆ故御内意申上ゆ。以上

夜半

野菊様

二柳は大阪の不二庵である。野菊は宇治田原の人で『花櫻帖』などに見える夜半亭社中であつた。蕪村の此添状で行脚に付きものゝわらじ錢問題は文献的に考證される譯だが、明治時代に於ても俳諧行脚はさうしてたゞで泊つて心附をもらつて廻國したので、前號に書いた連梅もその行脚の特權に生活してゐた一人である。もしその行脚が泊つた家で病氣になれば藥石の手當から死後の世話までしなければならぬ。その實例として下總の羽林といふ俳人が明治十二年「松島一見致度旨願出ゆに付」明倫講社から添状をあたへ、羽林はその添状を持つて福島縣東白川郡山下村字福住まで行脚し、その森下幸右衛門方で遽に發病して十月十二日敢なくなつた。その前同郡寶坂村の俳人壽翫事金澤照房といふ家で、明倫講社の紹介がある爲め二日の間宿泊をゆるされ、例のわらじ錢も貰つた事であらう。出立して間もない出來事だつたので、壽翫は早速森下方へ出向いて相談の上埋葬に附し、下總香取郡新里村の石田重三郎といふ羽林の身許が分つたので、急報に接した羽林の伴同姓倉之助がやつて來て「葬所見届遺物受取ゆ内旅日記筆止ゆ」次の發句が書き残してあつた。

秋の夜や月なき空も一詠め。

羽林

その醫藥及び埋葬に關する諸入費は前日泊つた家の壽甕と發病した家主とが引受けたので、明倫講社宛の報告によつて懇切な處置と、諸物價の低廉であつた事がよく分る。だが、いかに俳諧行脚を遇する道とはいへ、かうまで行届いた處置は稀有だつたと見えて、

右之通懇切之取扱ひに預りゆも本邦三千六百萬の同盟、殊に祖翁の余光、金澤森下兩大人に謝するの代り海内の風士に廣告す也

と『明倫雜誌』の第二號に「行脚の話」として感激的に掲出してある。

明倫雜誌の創刊と其内容

新聞風の俳諧に關する記事を雜録して行く方針で「行脚の話」などを掲げた『俳諧明倫雜誌』は明治十三年十二月廿五日附で第一編を創刊したのである。乙彦の『俳諧新聞誌』は俳諧雜誌の嚆矢であるが、木活から整版へ時代錯誤的な印刷によつて、然も年刊なので庵中月並の摺物を相距ることと遠くない。明倫雜誌は菊判の洋紙に活字で印刷してあつて、組み方は五號二段の純然たる雜誌

の體裁であるから、今日の俳句雜誌の先鞭をつけたものと云ひ得る。發行は月二回で紙數は二十四頁定價はたゞの五錢である。いふまでもなく俳諧明倫講社の機關雜誌として幹雄がその社主で、彼と同じく教導職に補せられた月彦の支持を受け、第一編にはその東杵庵月彦が明倫講社を設立以來今や社員二千になん／＼とするを述べ、

抑此社則タルヤ常ニ明倫ノ趣旨ヲ失ハズ、正風ノ意味ヲ忘レズ、發句文章ハ云フ迄モ無ク、連月ノ會日ニハ必ず敬神愛國ノ大道ヲ講ジ、

と發行の趣旨の俳諧教化策にあるを擧げ「祖翁今世ニ在ラバ此道ノ大教正タラン事何ノ疑フ處カアラン」とどこまでも神道に附會する事を忘れない。それを更に素學堂菊之の發行説には維新後官より三條の御教則を授け玉ひて、俳諧も神の國に事ふるの秋至れり。故に俳徒も教導職の任を辱うす。

と論じて俳諧神道説を強調してゐる。祝詞は月彦の外は大梅居澄江、田喜庵詩竹、夜雪庵金羅三人の寄稿である。明治三大家の爲山は十一年故人となつたが、春湖、等裁は現存するにかゝらず敬遠して、俳諧教林盟社に對抗する氣勢を示し、永機および梅年の晋雪兩門とも没交渉の態

度を取つてゐる。幹雄は「寂葉并發句體裁之辯」といふ白雄の『寂葉』を提唱する一文を掲げ、又「句解」と名附けた欄に

提灯はひるのものなり花の山

澁柿の終枝さけす仕舞けり

薩摩
八田知紀翁
下總
伊能穎則翁

右二句を註解してゐるが、一は桂園派の歌人で御歌所の家元、一は地誌學者として聞えた名家である。さうした智識階級にまで發句の愛誦される事を彼らの衿持とした點がうかゞひ得る。奥附を見ると

東京日本橋區蠣殻町二丁目四番地

本局 明倫社

社主 三森 幹雄

編輯長 小林 廣重

印刷長 正木 茂 翠

といふ風な堂々たる署名をしてゐる。此明倫雑誌はその後月一回發行になつたが、明治四十三

年幹雄の歿後暫らくして廢刊になるまで續刊されたのである。

梅年の『續一夏百歩』發企

幹雄の『明倫雑誌』が俳壇的センセーションを起したことは争へない。その發行になるまでの噂は諸方に傳はらぬ筈がない。永機はどうしてゐたか。この年の夏は「觀音の像日課一百枚を畫て」さうして、それに

月 雪 や 花 や 心 の 三 菩 提

永 機

と題句して知己に頒布した位で、あとは向島の其角堂で俳諧茶の湯を佗びて不關焉の態度であつた。梅年は四月八日——明治十三年——の深川要津寺の龍華會に詠じた、

散 か ゝ る 花 を 佛 の 生 湯 か な

梅 年

を結縁に一夏百日の間必ず一日一句を日課として「これに其日々の端書、また遠き國々の文音など、おもひよることをかきつけて机上にあり」七月十六日漸く百句にみちたのを見て、門人碧海が「こは何故なるや」とたづねたので、梅年は

晋子翁に花摘あり、湖十叟に續花つみあり、いづれも夏中の百句なり。よりて家翁三世蓼太、深川にばせを庵再建の年、夏中に百句を吐て一夏百歩と號て殘せり。其舊庵の地もなつかしく今年佛塚を拜し、佛生會の一句をせしより此事頻なり。

と發企の由來を答へたので、碧海は「師弟の因捨がたく稿を乞うけて、續一夏百歩と號て師が粉骨を永くのこし」報恩の一端にもせんと、その事を序文に記して出板したのである。梅年は雪門を昔に挽回する爲め明治九年の春、深川富ヶ谷に芭蕉堂を新築して

上棟の日

咲 揃 ふ 花 や 柱 の 削 榮

といふ句を吟じた事が『空陰集』に見えるし、前の『入像供養』といひ、今また此の『續一夏百歩』が蓼太の天明五年四月八日

要津寺灌佛會

花 御 堂 釣 鐘 草 も あ ら ま ほ し

蓼 太

此の句を起筆に『一夏百歩』の稿を成したのに倣つたといふのも、敢て事を銜つて賣名策を企て

たのでないのを察してやらねばならぬ。出板を引受けた碧海は二世蓬萊庵と號して梅年の高弟であつたが、雀志が明治廿一年、九世雪中庵を嗣號したのでその己を無視せるを憤り「よし、雀志はすゞめだな。おれは鷹になつて掴みころしてやるぞ」と一鷹庵と自稱して雪門を脱した氣慨家であつたと錦風居士から聞いてゐる。出板に關する諸費用は筑後の人で同じく雪門の鎮思亭花夕が補助したものゝやうで、碧海、花夕の兩著、梅年男吏中の補とその扉に掲出してある。跋は前にも書いた雷堂龍吟が筆を執つてゐる。

流石に争へぬ新東京人

梅年の『續一夏百歩』はその體裁を蓼太の『一夏百歩』に全く擬したもので、蓼太は必らずしも一日一句に限らず、日によつては二句も三句も詠んで手録してゐるのに、梅年は几帳面に一日一句づゝを守つたのが相違してゐる位である。蓼太が中村勘三郎座に羽左衛門の人形振を感嘆してゐれば、梅年は

廿二日 新富座劇場見物

明倫雜誌發行を中心に

名題鎌倉星月夜

荏柄の平太の役市川團十郎、殿中長問答さこそと思はれて大出来く

烏帽子 着た鎌倉武士やはつ鯉

と譽めあげ、此句の註に「家翁蓼太が口質に做ふ」とある如く

烏帽子 着た鯉見て來よ武士所

の古句取りである。又かれに六月九日四谷の竺關亭で初座、後座の道具名から會席の献立を記した茶會の記事あれば、これは向島の其角堂へ七月四日俳諧茶の湯に招れて、初座、會席、中立、後

入、引付の順で歌仙一卷を行ひ

床 如意に珠數

如意の銘
妙や

裏に

法

の

蓮

の

華

經

其

角

書

元祿三ツのとしきさらき

去來主應也

晋子傳來 文臺硯箱懷紙

ふたつとは珍らし過ぬはつ螢

梅年

葱にうつる軒のふる萱

永機

及び尙丸、晋江、蓮州、竹譚の六吟を録してある。『一夏百歩』には二歌仙を収めてあるので、この茶の湯俳諧一卷とは別に梅年、碧海の兩吟一卷を附載してその及ばざらん事を恐れてゐる風である。が、流石に梅年は東京人である。

慶應の戦争後、漸再建なりし上野寛永寺に詣

若葉越し光る臺の葵かな

と舊江戸を懐古して、これを新東京風景として佇徊する時代の背景をその句に忘れず、川越へ誘はれて行つて

勸農局魚養場に函館より種を取寄、鮭の飼付を見る

鮭育つ水に藍なすわか葉かな

と鮭の人工孵化に開化的な驚異をしてゐる。梅年が淡路の服部善四郎といふ嵐雪の通家から文通に接した事は『俳諧聚芳』に引用しておいたが、梅年が雪門に入る前、上總糸久の人養老庵羅江の門人であつた事實は、その孫の古梁に訪はれた詞書ではじめて知り得たのである。永機と共編の

『古今圖書發句五百題』は

五百題編輯筆はじめ

左右の手に先取わけし早苗哉

で見ると、前年六月二十一日から着手したので、廿六日の「五百題編輯中永機叟と同行にて暫らく麻布廣尾天現寺に籠る」といふ記事、それから廿七日の「閑室に諸縣よりの詠艸をしらべる折ふし、機叟の門人三癡、歩月、來て勞を助ける」とあるので、これが骨子となつて明治十五年右『發句五百題』四冊を刊行するまで約三年間を要した譯である。こんな按排に『續一夏百歩』からいろんな材料を獲られるので、内容的にはさう重視されないにしても、明治俳諧の研究には役立つところ尠少でないことが推察されやう。

教林盟社の『時雨まつり』

春湖の教林盟社は明倫講社に張合つて教化的の宣傳にとめる必要もなかつたのか、久しく俳壇的に沈黙を守つてゐたかに思はれる。明治十三年十月十二日の芭蕉忌を執行して『時雨まつり』

と題する小冊子を配本した位であるが、芭蕉翁に對する信仰的崇拜は教林盟社の時雨まつりが年中行事となる以前、既記の如く明治九年築地本願寺で大喬發企の二百回忌取越の法要が營まれ、翌十年には名古屋で竹意庵社中の同じく二百回忌取越し執行した事を追録しておかう。その式次第は本格的で頗る嚴肅なものであつた。

芭蕉翁二百年祭典取越

催 竹意庵社中

宗匠 甫

脇宗匠 醉 雨

執事 鶴 羨

床懸物 はせを翁句入文
いささらは雪見に

ころふ所まで

講者 芙 山

香 雲 錦

花 草 馬

香 銘 櫛

明倫雜誌發行を中心に

次同時雨

知客英齋

次の閒懸物

座見禾啓

きのふ松尾うし桃青來りて

予に改名を乞ふにいなみかたくて

八雲抄のはいかい歌に習ふて

はせをとよび侍ることしかり

月花のむかしを忍ふはせをかな

拾穂軒季吟愚意

執事晴圃

花梅
寒菊

古梅雅而
杉圃風遊

その懸物の季吟の詞書は永機の『新花摘』を見るに、此席の脇宗匠醉雨の所持するもので、捏造

したものとも思へないから眞實の問題はその筆蹟に接するまで保留しておく。席上

新藁の出初てはやき時雨かな

芭蕉翁の發句で脇起五十員を行つた記録は『祭典集』に收めてある。教林盟社の『時雨まつり』は扉に明治十三年十一月鶴とあり、藤堂詢堯齋の「清恬」といふ題字があるばかりで、記事を省いてあるので詳しく知り得ないが、正式文臺を立てたこと『祭典集』に掲ぐるところと同一と思ふから、式は大體それに準じて察しておくより仕方がない。脇起しの發句が『祭典集』と同じ句なのは暗合であらう。

脇起 俳諧の連歌

新藁の出そめて早き時雨哉

祖翁

門川寒みすゞ鴨の聲

建足しも先中ぬりに干あがりて

知己だけを皆まねくなり

重筥は何であるやらおもしろ

等 裁
宇 山
精 知
素 水

下りてのぼるもおなじ村道

吳仙

かげはこぶ月に追はるゝ雲のあし

鶯笠

露のにほひはひやゝかなもの

梅年

五十韻の表八句を抄出してあとは推測にまかせるが、春湖は初裏の花の座を受け持ち、五十韻一順の俳諧だから東京知名の宗匠五十人の出座を見た譯で、永機や幹雄は平句に配置されてゐるのも、かうした正式の俳諧には春湖、等裁が頑張つて新進といへども、その後塵を拜さなければならなかつたのである。その餘は諸人の發句を収録してあるだけで、題名の『時雨まつり』から豫想される内容的の面白さを持つてゐない。

爲流の惺庵嗣號と西馬門

再び幹雄を話題に上せるが、俳壇的に傳統の力を無視されぬ事を知悉して、春秋庵嗣號問題に策動した幹雄は明治十三年十一月十四日、明倫講社に於て惺庵西馬の二十年祭を執行した。文臺式に準じないで、神道の祭典そのまゝで俳諧一順を行つたのは明倫講社式と云ふべきであらう。

齋主	少講義	三森	幹雄
祓主	權訓導	兒島	可郎
大麻		正木	茂翠
典禮	訓導	葛山	五雀
宗匠	中講義	鈴木	月彦
副宗匠	教導職	野口	有柳

執筆兼讀師、玉串、幹事も講社の俳人がむろん勤めたのであるが煩はしいから省く。『祭典集』の正式文臺に比して、仰々しく寧ろわざとらしさが徒らに目につくに過ぎない。

西馬はことし廿三回忌に相當するので、その義子爲流は惺庵二世として俳壇に打つて出る事になつたが、幹雄はこれにも好意を寄せて『西馬發句集二編』の出版に盡力するところがあつた。『西馬發句集』は元治元年みき雄の跋を附して板行されたのだが、猶逸句が尠くないので爲流の編、牧雄、桑古の校合で廿三回忌を營むと共に、その二編が爲流の惺庵藏梓として發行された。春湖の序に

志倉爲流叟は惺庵西馬老人の義子にして、惺菴と稱するものは其號を襲へるなり。飛花落葉入代りて今茲老人二十三回の祥忌にあたりぬれば、其家集を編次し交友の喙を拾收して冊子なりぬ。

といふのが要をつくしてゐる。別に加部菴堂の序を添へて、二百句ばかりを四季に類題し、これにも幹雄の跋を附してある。

諸風士の詞花をつみ入て家集の二編を上木なし、靈前の供物にかへんと斗りしも、彫刻の半本然忌正當の望の日も打過るほいなさに

後の夜を頼むや月の魂祭り

爲流

とあるやうに全篇の過半は、諸國俳人の新聲で埋めてゐるのが、『西馬發句集二編』としてよりは、爲流が惺庵を嗣號した披露の意味をふくめて編輯したからであらう。爲流は西馬と同じく志倉氏、通稱を伊八とよんで、西馬の故郷である上州高崎に居住したが、幹雄の跋によると

子を見る事親にしかすと、先師在世より爲流大人其兆ありしにや、若俳諧を以て道を立むと思はゞ、墳墓の地を守るのみは、汝にも限るべからず。

とあるので、やがては東京へ出て俳人生活をする希望を持つてゐたのだらう。上州には乙瓢、かつみ、及び菴堂の如き相當有力な西馬門人がゐたのだから、その擁立で西馬の勢力を再握する事も至難でなかつたらうが、爲流その人に材なく後加賀に行脚して客死したのであつた。

尖端的季寄俳諧手洋燈

持扇題鑑から手洋燈へ

便利で明るい洋燈の光に行燈は顔色を奪はれた。それでも提灯だけは存在権を持つてゐた。家にあれば洋燈、戸外に出れば提灯をたよりに「黒犬を提灯にして雪の道」の時代背景は明治時代となつても同一であつた。「俳諧手挑燈」が俳席必携として廢らなかつた所以である。が、手挑燈は太陰曆本位の季寄だから、開化の世相に觸れるところがない。明治十三年萩原乙彦は『俳諧手洋燈』を著述して新季寄たる太陽曆の排列法を示した。乙彦は早く季寄に關して一家の見識を持つてゐたと見えて『季寄持扇』の増訂本に漢文で

黃鸝老ヲ嘆ジ杜鵑壯ニ翔ル。黃梅ノ天地閑居シテ無事ヲ愛シ四友ニ親ミ、蕭然トシテ日ヲ消ス矣。俄ニ一書賈帙ヲ捧テ而シテ進ム。之ヲ啓キ視レバ乃チ俗ニ俳諧季寄ト稱スル者ニシテ卷末ニ白雉ノ苗代水ノ一書ヲ併セ載ス。蓋シ源年浪草ヨリ出テ、玄同ノ歲事記ノ下流

ヲ汲ミ以テ別ニ一支川ヲ爲ス者也。然レドモ其源流悉ク清水ニ非ズシテ濁水交々流傳スル有。宜シク拾捨セザレバ謬テ味ヲ損ズベシ。惜哉這書流ニ隨ヒ沿習シテ清流ヲ撰バズ。習學ノ便覽ニ備フル爲乎。既ニ刻成テ之ヲ如何ントモスルコト無シ。其事々物々ノ正誤ヲ知ント要セバ讀書ノ功ヲ積ムニ有ラン焉。出格モ亦其期ニ有ル可シ。余ハ書賈ノ爲ニ聊文字ノ誤脫ヲ訂正シテ而シテ一時机上ノ四友ヲ煩シ、加フルニ午方先生ヲ勞スル而已。

時ニ慶應歲次丙寅天中節日江都萩原乙彦寫本ニ於テ識ス

と跋に不満の意を表してゐる。此の持扇は椿園増補の萬延元年板であるが、其後乙彦は新規に季寄を編輯する考であつたところへ、太陽曆の頒布があつたので、新曆に準據するのが最も賢明な季寄法であることを思つてゐた。然るに恒庵見左の『俳諧題鑑』が新曆による季題排列の先鞭を着けて明治九年出版になつて、これに出鼻を挫かれたらしい。手洋燈の序に「嚮ニ見左ガ『新編題鑑』ノ學アリ」とあるので彼の心事がそれとなく察しられる。題鑑は閑窓の序に

恒庵見左師、俳諧題鑑といふ物を撰み、常に懐にして吟行會席にも放したまはず。門人等是を乞て披き見るに、四時を分ちて鳥獸草木衣服等の物を賦し、神祭佛事の時日を太陽曆にあ

はせて撰み定め、初心の讀誤るべき物は假名を添へ、廢して用ゆべからざるは除き、遺風の行はるゝ物は頭に黒點を加へ分ちて載たり。

と要を摘んである如く、更に凡例にも「神祭佛事等太陽曆に合せて」と繰返して、神佛の行事を新曆に配合した點を唯一の特色として一言の註解も加へてないので、一般には重要視されなかつたらしく、年浪草や歳時記が依然季題の典據とされ、俳席用として前記の手挑燈及び持扇も重寶がられたであらう。その上故人花屋庵鼎左の『四季部類大全』が擧一の校正で明治十二年銅版で翻刻されてゐるので一層その點が明瞭に立證される。かうして新季寄に就いて俳壇人の無關心であつたのは今日から考へると不可解にさへ感じられるが、既記の『てぶりのひま』といひ、題鑑といひ、多少なりとも時代に目覺めたる者には、新曆適用の季寄に關して考慮を拂ふところがあつた事實をも亦拒み得ないのである。

外題學者の稱ある乙彦

乙彦は維新前木活字を以て『俳家新聞』を創刊した尖端人であつたから、新曆適用の季題書編

輯を早くから企圖した事であらうが、持扇の跋に一言してゐる如く彼には外題學者的傾向があつた爲め、さう無造作に著述されなかつたので、遂に明治十三年の『俳諧手洋燈』にまでその抱負を持ち越したのであつた。即ち附言に

俳諧ノ季寄ト稱フル書ハ山ノ井慶安三年増山ノ井寛文三年刊行ニ初マリテ、年浪草三餘草天明三年刊行
ニ大成セリ。其閒毛吹草寛文十二年嚏草延寶三年鼻紙袋延寶五年題林一句天和四年惠久保元祿四年新式大成元祿十一年版
通俗志享保二年篋櫃輪寶曆三年糸切齒安永五年小槌大成天明七年等の數書及び詞寄俳式中ニ雜出シタル御傘慶安四年版久留々慶安六年版便船集寛文八年版類船集延寶五年版糸屑元祿六年版ノ類頗ル多カリ。年浪草ノ後ニモ俳翼、多識編、俳諧歳事記、歳事記栞草、四季部類、季寄圖考、手挑燈再刻ノ類亦尠ナカラズ。各々大同小異アル耳。精疎ハ各編者ガ學識ノ深淺ニアルナラン。

こゝに列擧した書目を解説すれば、一編の季題史を述作するに由博識に煩ひされた爲めでもある。手洋燈にはそれらを逐一引用してゐる譯でないが、不審あればこれを参照して疑ひを決した例證は附言及び本文中にも隨所に發見される。現行の杜撰な新歳事記は全く顔色なしである。その新月例と見るべきは

冬 一月、春 二月、三月、四月、夏 五月、六月、七月、
秋 八月、九月、十月、冬 十一月、十二月、

の順位で歳旦を一月の別格に扱ひ、月毎に部類を八門に分ち、乾坤、公事、神佛、人事、衣食、家財、草木、氣形の項に各季題を収めてある。乾坤は自然、氣形は動物の事で、用語こそ舊式だが、季題の内容より分類すれば此八門は決して不妥當だとは云へない。題箋には『俳諧手洋燈萩原乙彦編輯』とあるだけだが、内みだしには『新題季寄俳諧手洋燈』とあつて其所謂新題なるものを本文から摘録すると、歳旦に海防調練始、陸軍始八海軍始九東京消防人出初四學校始十八があり、二月の紀元節神武天皇御即位日、陰曆辛酉年正月朔、三月の春季神殿祭廿一五月の靖國神社祭廿六六月の札幌祭十五八月の鹿島祭十八香取祭二十の如き新制定の祝祭日を掲げてゐる。舊慣を存じて擧げた季題では松前渡に就き

北海冬春波濤暴シ。故ニ舊四月始テ出岸シ九月限り歸國ス。依テ渡ルヲ夏トシ上ルヲ冬トス云々。今ハ航海四時留滯ナク只其唱ヘヲ存シテ昔日ノ不自由ヲ知ル。方今開明ノ盛世ヲ深ク仰ギ奉ルヲ示セリ。

と新説明を施したのはよいが、福壽草を指して「此花陰曆元日ニ必ズ開ク故ニ元日草ノ名アリ。今ハ人力ニシテ天然ノ觀ニ非レバ珍賞スルニ足ラズ」と拒み、七草粥に「朝廷節會ヲ廢セラル。民間從テ祝表スベカラズ。猶舊俗ニ依テ平食ニ充テ可也」と稱せるは一片の理屈に過ぎない。併し鞆フクラの註に「今小學校中ナル運動ノ一具、教員モ多クハ之ヲぶらんこと訛ル。卑俗ノ甚シキ之ヲ正シテコソ教トハ云ハメ。其正キハ由左波利」と説き釋奠に「ヲキマツリ」及び「セキテン」の假名を左右に振り、「維新已來〇學〇端ノ爲ニ廢セラル。然レドモ本年有志ノ徒東京舊聖廟ニ假行シタレバ此ヨリ春秋兩回ノ儀行ル、ヤ否ヤ」と述べて異學異端の異を憚つて缺字としながら、舊儀の復興を喜べるは今日より見て何人も賛意を表するに吝かであるまい。

耶蘇虫とコレラの強辯

洋學を異學と記する固陋を回避した乙彦ではあるが、滔々たる西洋かぶれには不快であつたと見え、繪踏の附註に

昔日天草ノ役アリ。逆徒靈穢ノ後筑紫ニ怪虫生ズ。其形牛ノ如ク頭ニ劍アリ。大サ藁ノ如

尖端的季寄俳諧手洋燈

シ。世ニ耶蘇虫ト曰フ云々。寛明事跡録卷ノ廿一寛永十七年六月ノ條ニ載タリ。然ルヲ方今弘法ノ時ニ至リテ彼ノ耶蘇虫日ニ増殖ス。終ニハ我が神跡ヲ蹂躪スルニ至ラザルモノ歟。吾輩井屋ヲ算フル野外ノ史、何ゾ窺ヒ知ルベキアラン。

と悲憤せるはまだく、恕してい。霍亂を解釋して

紅毛雜話ニ霍亂ノ蘭語コレトアリ。コレラ病名ノ古キ斯ノ如シ。西洋醫盛ンニシテ初メテコレラ病名アルニハアラズ。コレラハ即チ霍亂ナルヲ知ルベシ。然レドモ昔ノ霍亂ニ傳染ナシ。今ノコレラニ傳染アルハ如何コレ他ナシ。近年人民ノ食物異ニシテ且蕃客多ク異氣ヲ傳フレバナリ。彼痘毒ノゴトキ古ヘ我邦ニ其病種ナシ。廣東人來ツテ初メテコレヲ傳ヘ熱病ハ佛徒ガ傳ヘタル。共ニ國書ニ載テ明カ也。我神國ノ慘毒豈惡病アラシヤ。人民擧テ能ク古ヘヲ守ラバ神德著焉クシテ異疾ノ凶種自ラ盡滅セン耳。

此強辨を讀めば乙彦を開化人として扱ふには幾分の割引を要する舊弊家であつた。それから手洋燈には詞寄その他を附録してあるが、これは手挑燈の一部を抄出したもので、同書併式大概に對しては、

他日「俳諧瓦斯燈」ト題シタル一篇ヲ著ハシテ正風ノ俳諧タル唐宋名家ノ文法ニ原ヅキ、句數去嫌ヒニ拘泥セザル連句ノ活法、二句一句ノ扱ヒ等ツマビラカ一二ニ古吟ノ證ヲ舉テ俳席ノ闇童ニ添照スベシ。

と豫告してゐる。手洋燈のつぎに瓦斯燈を板行する思ひ付は奇抜であるが、これは出版に至らなかつたものか今まで手に接しない。要するに手洋燈の効果は

陽曆の御代と治りては俳諧の季寄なるものも校訂せん的一端なれば、先に撰者ありて頗る搜索の便捷を資るの題鑑新刻成れる。尙是に新題を参考し部類の搜索を増補して手洋燈の上梓成れるに、予も此閱者の員に加はりて庶幾ス後世の精校を俟と云

明治十三年一月上旬

佳峯園主人 等 裁

右の跋に見える程度のもので、乙彦も未定稿としてその静岡行に際し取敢ず出版した次第を本稿未全ノ際駿州静岡ノ新聞社ニ聘セラレテ其社長ノ任ヲ帶ビ、匆々トシテ發軔スルニ及ビ結束校訂兩ラ門生松雄門人悟秋ニ委シタリ。然リト雖モ疎漏誤脱ハ余ガ罪ニ有ザルヲ得ンヤ

對梅宇主人記

と断つてある通り明治十三年四月版權免許を得、同六月刻成つて發賣され、明治二十六年九月再刻されたものが現に流布してゐる。原本の體裁は豎三寸八分横二寸六分の袖珍型で紙數百十六丁、諸名家の四季新聲を添へてある。

静岡新聞社の乙彦招聘

静岡新聞の社長として乙彦の招聘されたのは『俳諧手洋燈』の出版になる約四ヶ月前の明治十三年二月であつた。静岡新聞は前年八月一時休刊したのだが、乙彦を社長に呼び迎へたその二月廿五日再興第六百六十五號を發行した。附録の全面を縁門型で輪廓を取り新社長歡迎の國旗を交又し、紅提灯をその縁門に飾り、縁門は墨に草色、國旗の日の丸と紅提灯は赤の色刷である。芝居の名題披露のやうに社長乙彦を紹介する社員一同が紋服で手をつき、乙彦の口上を描いた挿畫入りで本文は五號活字を段抜きに組んである。

開業の今日即今諸看官へ初の拜謁、洋燈顛頭の瘦翁が廻はち萩原乙彦でござり升

「へい〜僕が東京の乙彦と申し升何もしら髪うめほしの梅星叟うめほし當社いたうしやに長ちやうとは熱釜布あつかましくも御當地ごたうちへは

初めて出勤しゅつぱんにござり升れば終お詞ことばの所損きこない編集生へんしゅせいが筆頭ふでさきに綾做あやなさるゝもしら玉たまか何ぞと他に咎とがめらるゝ誤訛あやまちも時々ときどきは必かならず有あるふとぞんじ升其邊そのへんは御用捨被ごようしや下只たゞ幾重いくへにも御鼎ごひら力を奉まかせ願上ねがひ二升

戯作者張りの此口上が『かなよみ新聞』その他當時の新聞文牀であつたので、狂文亭春江及び『東京月とスツボンチ』の社主篠田仙果の祝詞が、大まじめな文章中に三分の洒落を飛ばしゐるのも、その時代の戯作文に支配されてゐたからであつた。仲の町の藝妓小せんおんのまちのうまいの流行唄の替唄祝詞までれい〜しく掲げてゐる。

猫ねこじや〜とおしや升が、猫も足駄あしだはゐて杖つえついて（ころぶぎづかいのない顔がんしよくですから）エツチラ。ヲツチラ。静岡ニウスしづまの乙彦君おとひこを祝詞しゅくごやんす。いつも乍投書家君なげがみの中なかへのそ〜鼻はなつかき、厚皮面あつかわ〜かへり見れ婆ばかぶる袋ふくろも幾いく千せんまい。しかし貴社きしゃにはさいさきも。よし原猫はらねこの飛とあがり。仲間猫なまねこのおわらひ草くさも。猫ねこばどではしらに爪つめ。ヒツカキ〜お目出めでたふト、のどを鳴なしてゴロニヤン〜

此花や皆實のとまる枝配り

東京仲之町藝妓小せん

尖端的季寄俳諧手洋燈

此附録第一面に新社長乙彦の就任挨拶の次に

送別

うぐひすの喬きに還る首途哉

成島柳北

夢に見た富士を目當や春の旅

伊藤橋塘

友人乙彦先生聘されて静岡新聞に社長たり

假名垣魯文

移さるゝ老木の榮や東風の梅

操觚界一流名士の發句があり、別に東京諸大家送別之吟は三段に跨つて掲載してあるので、名こそ堂々たる新聞であるが俳諧雑誌に近い内容である。

おちつきてまづ静岡や梅の花

春湖

花にこそ筆をしもとの駿河舞

永機

寒く共心よからん富士山風

梅年

見送るや寒梅の香を慕ひつゝ

等裁

梅戀ひて先待春のたよりかな

みき雄

その他三十餘家、俳壇人を擧つて其行を壯にした事が窺はれる。ところが乙彦は静岡に着くと病臥して暫らく門人爲梁が代筆してゐたらしい。その上風俗壤亂で處罰されるなど、新聞社に取つては大打撃であつた。新聞の體裁は菊倍判三段組四頁の日刊で定價一枚八厘、

静岡江川町拾壹番地

本局 提醒 社

社長 萩原乙彦

編輯兼印刷主任 太田榮彦

乙彦は社長として署名してゐるが、實際は捨扶持の看板に過ぎなかつたらしく、それ以來自然俳壇から遠ざかつて行つた。

明治五百題と開化の部

歳事記と一萬句は故今井柏浦氏の一手販賣であつた。現代の大衆俳人も机上に此二冊だけは缺かさない。季寄と作例の普及性を實證してゐる。新曆適用の新季寄として『俳諧手洋燈』が現は

尖端的季寄俳諧手洋燈

れた以上作例集の出ない筈はない。明治十二年手洋燈より前に『古今明治五百題』が其先驅をなした事を忘却するところであつた。

今や俳諧の世に行るゝ事湧が如く燃るがごとしとやいはん。こたび下總なる聲畫庵のあるじ四方に千題のほ句をあつめ、小築庵、不去庵の兩雅哲に撰を乞て世に廣くせんとす。此學や初學びの道の枝折として、其もゆるにあやまちなく涌に濁りなからしめんとするの業にしあれば道に厚き志を誰かは賞せざらん。たれかは愛さざらん。おのれ又其流れの末におり立て水筋を通し、薪をそへんとする事しかり。

明治十一年夏日

花本芹舎識

時年七十五

此序文にある聲畫庵は東氏、旭齋と號して下總香取郡多田村の人である。乙彦の『俳諧手洋燈』も旭齋のすゝめで編輯したのであつた。選句を相談した小築庵は春湖、不去庵は幹雄である。凡例に「今此明治五百題は元祿の名家を始、中古近世の數百家の名吟を目的とし、現在の諸家數十章を輯め」とあるが今人本位の發句集である。選句の方針は「王政維新の際太陽曆に照準し、多

くは天朝の御哥式に倣ふことなれば、際だちたる廢題に至りては佳句といへども省く事あり」とは云ふものゝ新季題に乏しく、舊季題中に多少の取捨を施した程度である。採録せる季題千九十八題、句數五千八百句であるから「名義は千題集と披露すといへども、初學の風子呼安きを要とし明治五百題と改號す」とあり、千題集として寄せ句をつのり、五百題の人口に慣れたるを以て改題したのである。東京時代の作者は既に故人となつた爲山、猶生存する等裁、芹舎、乙彦、永機、みき雄、梅年、曲川、蓬宇の諸家と共に、傾斜の婦人を多く見受けるのは編者の好みによつたのであらうか。

大	吉	女	伊勢桑名	藝	妓
琴		子	同	藝	妓
増		花	東京花廓	稻辨樓	娼妓
小		倉	東京花廓	稻本樓	娼妓
小		紫	東京花廓	角海老樓	娼妓
小	せ	ん	同廓仲之町	娼	妓

尖端的季寄俳諧手洋燈

一五七

藝妓が二人、娼妓が四人ゐる。その中で

月かげにそれかとおもふかゝし哉

大吉女

が一番光つてゐる。『猿蓑』に島原の名妓奥州のほととぎすの句が見え、『櫻かゞみ』の如く吉原の遊女のみ句集も存在するが、作例として知らるゝ五百題の類に、藝妓の句を採録したのは新時代の空気に觸れてゐる。それよりも面白いのは巻中開化の部である。

權利義務 はねかんすちからかくして雪の竹

稲 處

國法民法 うゑる田や刈をさめたる麥の跡

蓬 宇

租税賦役 うし馬も只には居らず稻のあき

はじめ

萬國交際 蝶鳥の遊び廣げし野山かな

石 芝

これは新熟字を發句で説明したものであるが、開化的事物に關しては

瓦斯燈 君が代の道に闇なき燈し哉

吟 風

馬車 投錢で氷買けり馬車の客

朝 昇

人力車 客待の車夫も居眠る日永哉

あさの

新聞 居ながらに世の中をきく火桶哉

唸 風

鐵道 菜の花にのこる畑や車二里

春 湖

の句々を誦するといくらかその時代の世相が彷彿されて來る。明治五百題の明治の二字を此開化の部があつてやく恥かしめない。出版元が東京でなく『俳諧手洋燈』と同じく下總佐原の書肆朝野利兵衛であるのは、編者旭齋の緣故によつてであらう。

連句の月並化と語格論

右書のローマ字譯俳句

今は Alphabet を以て發音的に表示するローマ字を國字に採用すべく、その建議案の議會に提出せらるゝ時代である。ローマ字論者は常識的に大衆を克服してゐる。私は『俳諧一ツ葉』の錦風句鈔に振假名を施す煩をローマ字に代へて Helbun 式で譯註したが、新教育を受けた現代人にはローマ字に全く文盲の者がないので私の企圖を否定する頑迷者は一人もなかつた。が、東京時代の早期ローマ字に對する一般的理解を求めるとは無理である。俳句をローマ字に譯出せる試みとして、英人ゼームスの署名ある『殘香集』所載のものを見れば思ひなかに過ぐるであらう。併し俳句のローマ字譯は江戸時代から既に俳書に散見するところで、この『殘香集』を以て嚆矢とするものでない。芝山の『四海句双紙』にも見え、士由の『美佐古鮓』には長崎出島の和蘭商館の Hendrik Doeft の蘭字譯の跋に振假名をしたものが掲出されてゐる、それから見ると『殘

香集』のローマ字譯は筆耕の無識からかも知れないが、滑稽にも振假名を取違へて施してあるので、一句づゝに引はなして了ふと、一語は一語と判じものゝ如く全くちんぷん、かんぷんである。

na	サ	A	サ	sa	ナ	Sa	ア
ku	ク	ma	ハ	ku	ク	wa	メ
ka	ラ	a	ル	ra	カ	ru	ア
wa	カ	hi	モ	ka	ハ	mo	ヒ
dju	ナ	ya	ノ	na	ス	no	ヤ
			ナ				モ
		mo	ク			na	ク
		no	テ			ku	ニ
		ni	ミ			te	タ
		ta	ラ			mi	ユ
		yu	ル			ra	マ
		ma	ル			ru	ス
		dju	ル			ru	

振假名の附違ひに噴飯されると共に、ローマ字の綴り方がヘボン式とも違つてゐる。「ズ」を dju とした如き d が一字よけいである。此綴り字のまゝでも明瞭に書き現はさうとするには國語の右書、豎讀では不適當である。

これを書改めて左の如くすれば意はよく通ずる。

ア	マ	ア	ヒ	ヤ	サ	ワ	ル	モ	ノ				
A	ma	a	hi	ya—	Sa	wa	ru	mo	no—				
モ	ノ	ニ	タ	ユ	マ	ズ	ナ	ク	テ	ミ	ラ	ル	ル
mo	no	ni	ta	yu	ma	dju	na	ku	te	mi	ra	ru	ru
ナ	ク	カ	ワ	ズ	サ	ク	ラ	カ	ナ				
na	ku	ka	wa	dju	sa	ku	ra	ka	na				

障るもの

無くて見らるる

櫻 哉

雨 閒 や

物に堪はず

鳴く蛙

『殘香集』は下總香取郡島邨の俳人花翁一貞の爲め、追善に嗣子叟明が明治十一年板行したもの

で、集中に

外國人に普門品を講ずる時、その座にてよめる歌こゝに記すになむ

妙ぬ法を外國人にゆひそめて

蓮のいとのおらむかぎり

といふ竹窓の歌が見えるから、此外國人が蓋し英人ゼームスであらう。並木栗水の漢文の序及びみき雄の跋がある。ローマ字譯の俳句二章は故人一貞の遺吟をゼームスが譯したもので、ゼームスその人の俳句ではなからう。

予雲の『明治俳諧八十六歌仙』

發句は本格的約束も單純なら運座といふ大衆的な方法もあるので、入りやすく面白くもあるから、開化的な世相と没交渉であつても流行していつたが、連句となると規則を覚えるだけでも容易でないし、その會席もせいゝ五七人に過ぎないからして、時代の傾向を推知して新發展策を講じない限り大衆から見放されるのは當然である。だが茶の湯や謡曲が趣味の人に喜ばれるやう

に連句も古典的には保存されて、俳諧師として生活するには其一般に通じなくては宗匠とよばれる資格がなかつた。明治十年代の連句は善哉菴予雲の『明治八十六歌仙』乾坤二冊を見ればおほよそ推察される。永機を中心に編輯されたもので、その個人色が強く現はれてゐる。例言には甚だ漠然としたものであるが、連句に對して懷抱と批判の標準を説いてある。その一に、

附句は往古より三變也。昔は附ものを專とす。中古は心附を好み、元祿此かたは句、響、撓、などいふ所をよしとす。されど一卷のもやうにより附もの、心附も亦あるべし。

芭蕉翁の遺語として知らるゝ付句三變の法である。『去來抄』から抄録したので編者の一家言でないが、今さら説かずもがな贅言である。その二は

さし合は御傘、はなひ、等を用れど、彼さし合くりといはんよりの語を思へば、強てせん
さくの沙汰にも及まじくや。

「さし合は」連句用語の日常語化した一である。こゝでかう附けると前に差支へるといふ程の語義である。支考の『古今抄』に「古式に指合、去嫌といふは、さして名目の差別はなけれど指合といふは手爾波をいひ、去嫌といふは象物の類ならん」とある如く、指合は用語上、去嫌は事物の

意味に解してよい。このさし合は去嫌をふくめて『御傘』は貞徳、『はなひ』は立甫の規定したものである。「さし合くり」とは芭蕉翁がそのせんさくのみを事とする似而非作者を諷刺した言葉である。『御傘』や『はなひ』を典據とする陋習はまだく、抜けなかつたのである。その三は

逃句は天象、時節、景色、などに三四句の附味を治め後の運びを促すなれば、却て功者の場也。

人事の附込んでその展回を難しとする折に自然の景物を以て、前句をはづして逃げを打つ方法を「逃句」といふのである。これは連句作者として頗るずい、卑怯なやり方に聞える用語である。秩序もなく書きならべてあるが要約すると此三條になる。さうして模範的な連句の作例として

『炭俵』を擧げてゐる。編者予雲は永機の門人であるから、俳系上よりして其角の選集を推擧しさうに思はれるが、梅室時代に殊に流行した『炭俵』調を依然として信仰してゐたからである。明治の連句としての價值批評に乏しいものである點は此一事から推定される。『明治八十六歌仙』を通じて永機的一座した卷は三十二卷に及んでゐる。その永機に師事した詢堯齋は舊藤堂藩主であるから、永機と一座したものの六卷を採録してゐる。春湖の六卷、等裁の五卷は三大家として敬意

を拂つたので、京都の芹舎の七巻、名古屋の羽洲の七巻は連句作者として有名だつたからであらう。雪門の梅年が一卷、太白堂派の吳仙が一卷、明倫講社のみき雄が一卷、挿入されてゐるのは他山の石以て磨くべしとしたのであらう。明治十三年三月東京書肆光輝藏板で、半紙半截の携帯の便利を計つた木板本である。

連句に映せる新風俗相

新東京の景物及び世相は連句の推移には好対象であるべき筈である。それが悲しい事には風流に囚はれた眼に映らない。『明治八十六歌仙』を厭くなきまで求めても明治といふ時代の投影がない。新材料のないばかりか、その表現、その附句に於て調子の低い『炭俵』式を脱しないのである。強て求めれば、

きぬた打麓の露に住まじり 予 雲
さゝぬながらも捨ぬ大小 永 機
時非なり矣。名ばかり士族の僅少な秩録をあてに、遠近の砧を佗しみつゝも住まじり、大小だ

けは武士階級の象徴として今は腰にこそさゝね、座右をはなさぬといふ附け方で、佩刀廢止令にそれとなく不平な語氣がある。

有平もちよつと薬の薄荷入 正 義
尾の道までの汐はたらつく 永 機

南蠻の飴玉と見てよい。『言海』には佛蘭西語のアルヘイル即ち砂糖説をあげてゐるが、葡萄牙語の aléoa を語源とする説がよい。有平糖は明治以前から製菓法を知られたので、その語を時代背景とはされないが、附け方で新時代味を出せるものを尾の道までと逆戻りをしてつた。

徒然のあまりに香を利習ひ 雪 潮
萬年青の會も流行止む頃 等 栽

平凡な前句だ。明治の早期萬年青が非常に流行つた事を思ひ合せると、新東京の空氣を萬年青の一時的な流行で描いてゐる。でなくとも萬年青で前句に魂を吹込んでゐる。

百味たんすが先へ引越す 永 機
小使も仕さうな犬を飼ておき 詢 堯 齋

漢方醫はすたれて行つたが、診察も投薬も手輕であつたから患者はまだくあつた。百味箆筒は藥入れである。「小使」は役所向の新時代語で、それが前句を新舊世相の對照に效果あらしめてゐる。

銅 樋 落 る 惣 屋 根 の 水 春 湖
苘 盆 み な が ひ か へ て 吳 服 店 永 機

瓦庇の大きな店構へ、帳場格子が奥の方にあちこち見えて、前垂掛の中番頭が接客用の苘盆を一つづゝ前に置いて商ひをしてゐる。百貨店化しない以前の吳服屋はみんなかうであつた。

打腰のさし合をさけ、變化を三句のわたりに求める技巧は流石手に入つてゐる。

廣くとしてうそ寒き奥座敷 採花女
一ト手争ふ圍碁のかけ引 芳 洲
碇解く舟の都合を問ひ合せ 採花女

打腰は前々句をさしていふ連句用語であるが、その打腰の家躰を水邊の舟に轉じて、前句の圍碁は打腰の奥座敷にも、後句の出舟にも無理なく連繋してゐる。作者の採花女は故人大蟲の同庵

であつた。俳諧師の妻女は内縁でも妾上りでも同庵と稱した。採花女は才氣のある女で、若い後家ながら點者として生活してゐた。此附合の「一ト手争ふ圍碁のかけ引」で對みき雄との一事件が聯想される。それは大蟲の生前みき雄と一局を争つて、ふとした言葉の行違ひから口論となり、短氣のみき雄は碁笥を振上げて大蟲を撲つた。それが原因で大蟲は一命を早めたと云はれる。採花女はみき雄を怨んでいつか復讐してやる決心を持つてゐた。さう聞いてみき雄も寢ざめがよくない。もともと碁の上で手出しの早かつたのが、大それた事になつたので今はつくづく後悔してゐる。で、敵としていつまでも覘はれるのはつまらぬ。みき雄はあたまを下げて採花女に詫びを入れた。採花女は宗匠にでもなる人間だから芝居氣があつた。それでは水に流しませうといふ一段となつて、みき雄の頭巾を出させ、その頭巾を刺して女敵ならぬ亡夫の怨みをはらした事として、此一件の解決を告げたさうである。「圍碁のかけ引」から思ひ附いたので一挿話として記して置く。

東京までの持廻り歌仙

連句は一席一席に限らない。或席で巻き掛けたものを遠く持つて行き、別の一席で一巻にまとめる方法も行はれてゐた。元祿の蕉門にも『猿蓑』の梅若菜の巻は天津で巻起して二の表三句から伊賀へ行き、京都へ戻つて纏められ、それが又『勸進牒』には江戸で巻了つて、後半は全然新規なものとして記録されてゐる如きである。『深川集』にはその移動を註記した巻が見える。明治時代の連句で同一様式の持廻り歌仙が慣行された例として『明治俳諧八十六歌仙』の一巻を擧げて解説しよう。

京都の俳人一道居翠春は惟然坊の素牛が第三までを認めておいた詠草を所持してゐた。

さぞ 礎 孫 六 や し き 志 津 屋 敷
 へり とり 薄 夜 寒 さ の 月
 鹿 笛 は さ び し き も の 誓 に て
 其 角
 素 牛
 荷 兮

といふので『曠野』に「關の素牛にあひて」と詞書のある發句である。素牛の挨拶はある筈で此協句は知られなかつた。同じく『曠野』に「荷兮が室に旅ねする夜」といふ其角の句があるから、此第三はその時附けたのであらう。『五元集』には「みの路に入て素牛にて」となつてゐる。箕十

の『志津屋敷』には正秀の序に「嘸きぬた孫六屋志津屋敷といへる晋子が吟は十年あまりにや」と引き、左の如く説明してゐる。

孫六は三尺の霜のひかりのみしられて、跡はむなく一杯の土をだに残す事なし。志津屋敷は兼氏が名にふりて弓手塚、妻子塚といへるにはさまりしを、いつの比にか鋤されて田面となれば、麥の浪そよぎ立、稻の雲引はへたり。

此序は元祿十五年「十年あまりにや」は概數である。其角の旅行は貞享五年で十六年前になる。關孫六、志津三郎の二人は刀鍛冶として知られたが、その荒廢した屋敷跡を見て其角の感慨を詠じた發句である。さて翠春は素牛筆の詠草切を獲て美濃の關に旅し、その俳人露牛をうながして次韻を試みた。即ち

脚 半 を 解 け ば 足 の が く つ く
 帆 を 卷 て 簾 を 引 上 る 追 風 也
 兀 盡 した り 眼 つ ぐ き の 山
 犁 春
 露 牛
 犁 春

と、これで表六句を叶へ、初裏から竹臺、素陽、靜處の二人を加へたが、名残の表は名古屋へ運

んでその二句目を

行燈の氣色は暮るゝ際にあり

羽洲

町で水鶏を聞も水すぢ

犁春

羽洲に付けさせ、それに甫及び完鷗をまじへて三吟とし、名残の裏の二句目は東京へ来て、向島の其角堂をたゞき、

どちからも引手の穴の見え透て

永機

南部行李に着替かさばる

犁春

と、永機と對坐で滿尾させる事とし、美濃、尾張の二國は素牛、荷兮の二作者にちなみを寄せ、東京は舊江戸の其角の由縁を求めた譯である。名残の花及び舉句に

さぞ其角薄花櫻渦さくら

永機

文臺おろす反故まで春

筆

「さぞ其角」で發句を思ひ起し、「文臺おろす」で一卷の首尾を括り、舉句を筆と記したのは執筆の略稱で、脇起しの格を擬したこれが古例である。犁春の附記に

晋子、素牛、荷兮、三翁の第三までの風吟、惟然坊がしたゞめおかれし一軸をこの秋、美の國關の驛に持行て露牛に見せて次韻をはじめ、又尾張に至りて二三子の付句を乞ひ、ついで東京其角堂の許にて滿尾を爲す。是此三翁に因みある國々の風士なればなり。

とある所以である。それ故此集に收むる歌仙は明治俳諧を標榜してゐるが、全卷蕉門の古格を守つて、其附句の言葉さへ一句づゝ檢討すると、

月はおそかれ岸の螢火

蓬宇

は『冬の日』の「月は遅かれ牡丹ぬす人 杜國」の古句取であり、

書なぐる墨の薄きもなつかしう

澣十

に『猿蓑』の「かきなぐる墨繪おかしく秋暮て 史邦」を摹し

ほつれたる案山子の笠の傾きて

しつか

で『猿蓑』の「はつれたる去年ののねごさのしたゝるゝ 凡兆」を句はせた附句に出逢ふのである。

明治早期の代表的連句集として評價するには、甚だしく概念的で月並化されてゐるので、無條

件にはこれを許容し難いのである。

係結び中心の俳諧語法

早期俳人の保守傾向は俳論に關する著述を一冊も持たなかつたので判る。表現の技巧をすら天爾遠波の正否に限る事とし、問題の解決は語格の如何にあるので、本居派の係り結び説は絶対條件の如く過信されてゐた。古今の發句を一々その係り結びに配合し、例解する煩勞を厭はないのであつた。芙蓉庵富水の『俳諧作例集(上下)』をその一書として擧げてよい。本居派の『紐鏡』を手本としての證句は果樹園の『^{はい}玉のひかり』でほど盡してゐるが、天保十二年の板本だから、作例集はその説を承けて今人の發句を附録した點に多少の特色を有してゐる。作例集は明治十二年の刊行である。富水は序者の翠園主人鈴木重嶺に就いて語學を修めたのである。

○冠のや

里言ノ

岡崎^ヤ矢矧の橋の長さかな

おほよそ歌も發句もながめを本とする故にかく冠に^ヤとくつろげながめすてたり。^ヤも

じをへだて、ゆくりなきことがらをよむべからず。此例歌にも「おしてるやなにはのみつ
「みまさかやくめのさら山、などよむを正例とす。里言は只ノと云心なり。岡崎の矢矧と云
べきを^ヤとは云し句なり。

此句は『冬の日』の歌仙にある杜國の附句である。俳諧語法の問題となる「や、かな」の一證句によく引用される。作例集は「玉の緒四の巻」にもいへる如く、此例いづれも下のむすびは^ヤにかゝはる事なしとあり。斯心うる時は^ヤ哉何のむづかしき事かあらんと頗る無造作に解釋してゐる。前記の解説に「ながめ」とある詠嘆の「や」であれば、「哉」に係はらないとすれば發句の二段切れは無條件で肯定してよい事になる。『玉の緒』を過信せる結果である。又

○疑のや

里言^{カトウヂヤ}

木がくれて茶つみも聞^ヤほとゝぎす

是はうたがひの^ヤなり。ひとわたりにみる時は、疑ひとも詠ともみゆる句なり。今世の人此疑のけぢめある事を辨へざる故に、自身に詠たる句をすら疑か詠をしらざる人多し。はづかしき事ならずや。

芭蕉翁の發句で『炭俵』に出てゐる。傍註の「カトウヂヤ」は「か、どうぢや」の意で、句意を「茶摘も聞くか、どうぢや」と解したのである。さう聞えない事はない。これは一見解である。その他は取立て、引用する説もない。今人の證句は

はの格

野は。か。れて。た。と。む。き。あ。ひ。ぬ。海。と。山	素	石
落。葉。さ。へ。む。さ。と。は。ふ。ま。じ。神。の。場	金	羅
ま。だ。そ。よ。ぐ。ふ。り。は。は。な。れ。ず。夏。枯。草	澄	江
早。乙。女。の。あ。が。れ。ば。晴。る。く。も。り。哉	琴	麻呂
雨。乞。に。湯。立。の。釜。は。泌。る。な。り	採	花女
窓。あ。か。く。夜。寒。の。月。は。出。に。け。り	芹	舎

圈點を施して係り結びを指示してゐるが、圈點と引線との關係は説明をしてない。俳句の語格的解釋は江戸時代の語法を無視すると一知半解斯の如きものに過ぎない事になる。

新舊過渡期の人物批評

明治五年の太陽曆頒布の影響から明治十三年の『俳諧明倫雜誌』の月刊までの俳壇的出來事を叙説したが、個人的の考察はその物故した年を以て全生涯を眺めた方が便宜なので、こゝで一括してその傳記及び句振りを批評する前に、最も惜む可き人物としては俳諧研究史に偉大な業績を残した曲齋瓢子と、早く既に近世十家に擧げられ明治三大家として世間的に仰望された月の本爲山がある。曲齋がもし新東京に出で、開化の世相に觸れたならば、子規以前の革新的俳人となつたであらうと思ふ。爲山は年の功で偉くなつたので、實際はそんなに惜まれる仕事をした人物でなかつた。又江戸の戯作者が風俗史の材料を俳諧に求めた考證系統を引く隨筆家加藤雀庵も第二期——明治八年に故人となつた。それから江戸の通人趣味を以ていはゆる「へいけい師」を幫間的に援引して、新東京座とでも云ふべき一派の阿心庵是佛、この人は髮結床の株を多く持つてゐて、大三河屋の旦那と呼ばれた——及び新吉原の大黒屋螺舎秀民が明治七年、同十年と物故して

江戸前の通人一派は漸次凋落して行つた。俳壇に於てむかしながらの門閥を擁した太白堂孤月はその一門三千七百名と算せられたが早く明治五年歿した。雪門の六世推陰、七世鳳州は年を同じくして明治七年に故人となつたといふ風に、年表的に記載して行くと限りがないので、やゝ重視していゝ人物のみを引抜いて目的の個人的考察に入らう。

連句早見の寄三と五渡

七部集に關する鑑賞的諸抄を著述された幸田露伴氏の座右に置れて、その連句の捌きに必ず参照された一書に『七部集連句早見』があることを氏に接近した人は知つてゐるであらう。活版になる以前のもは一枚の早見表で、歌仙中の四季の配置を示しその季の指定を彩色別として、月花の定座の變化、戀句の出場所を一目瞭然たらしめたものである。嘉永元年惺庵藏板として刊行されたが、河田寄三輯とある如く實際は寄三その人の新案であつた。寄三はまた去來の『伊勢紀行』の稿本を所持する舎兄南々と計つて文章の『寢轉草』と合輯し、兩俳哲の百五十年忌に覆刻を企て、嘉永三年出版した。武藏國榛澤郡中瀬河の逸淵門人で柿園と號した齋藤南々の弟で、家

を出で、河田氏を嗣ぎ、通稱を甚平と稱し、俳諧を兄と同じく逸淵に學んで不知庵、又、水石居と號した。『俳諧年表』に武州熊谷の人通稱甚兵衛とあるが、百古の『流行百家發句集』の名錄に掲ぐるところが正しい。慶應三年その還曆に亡兄南々と姉の文女の發句集を出板したが、寄三の家集は上野の同門箚言が幹雄と校訂して明治六年『寄三發句集』と題して乾坤二冊に收めて板行した。家集の出る前年の明治五年九月十九日、寄三は享年六十六を以て歿した。幹雄はその著『俳諧名譽談』に河田寄三の美談として、彼の「一日も忘るゝあたはざる」寄三の句は

日の出より月の入るまで春の海

吹かぬ日もつのる斗ぞ秋の風

この二句であると激稱してゐるが、『寄三發句集』を見ると

鎖明て這入れれば残る寒さ哉

影すむやたゞ四五本の竹の秋

刀根川船中に一瓢の興をまうけて

船ばたをたゝいて下る扇かな